

クエゾノ遺跡2

——クエゾノ遺跡第4次調査の報告——



2017

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行つて、記録保存を行っています。

本書は、早良区梅林7丁目地内における宅地造成工事に伴い行われたクエゾノ遺跡第4次発掘調査について報告するものです。

クエゾノ遺跡は、これまでクエゾノ古墳の発掘調査（クエゾノ遺跡第1次調査）の成果により、遺跡の内容が部分的に判明していましたが、古墳を築造するような当時の集落などの生活遺跡については不明な部分がありました。しかし本書で報告するクエゾノ遺跡第4次調査の成果により、当地周辺に、弥生時代から古代・中世まで続く、拠点的な遺跡が広がっている可能性が推定できることになりました。

特に今回の調査において検出された、弥生時代の可能性が高い床面積約140 m²の超大型掘立柱建物やそれと前後する弥生時代の掘立柱建物群は、当地が弥生時代の拠点集落の一角であった可能性を示すものであります。また飛鳥～奈良時代の硯が複数出土しており、古代においては何らかの官衙（役所）が周辺にあった可能性が示唆されます。

今後本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、学術的な研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂けましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただいた調査委託者様をはじめとする関係者の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成 26 年 8 月 19 日から同年 11 月 1 日まで発掘調査を実施した、共同住宅の建設に伴う、クエノ遺跡第 4 次調査の報告書である。
2. 調査は、遺構検出面を第 1 面、および第 2 面の 2 面とした。ただし部分的にその間で「第 1 面下」として調査した遺構検出面がある。第 2 面については「調査の経緯」で記述したように、本来の発掘調査対象範囲の一部のみ完了し、その他の部分は未調査として地下に現状保存している。遺構の呼称は記号化し、堅穴建物（「住居」とは限らないので「建物」とする）を S C、土坑を S K、柱穴などピット状遺構（自然遺構を含む可能性あり）を S P、掘立柱建物や柱穴列遺構を S B、性格不明遺構や石敷遺構および石積遺構、石列などを S X としている。なお掘立柱建物（柱穴列）については、図面整理時に推定したものを含んでいる。
3. 本書の遺構図に用いる方位北は国土座標北（世界測地系）である。調査区の座標系も国土交通省が公表している近隣の測量基準点から国土座標（世界測地系）を移動して設定した。また調査区内の標高も、国土交通省が公表している近隣の測量基準点に付与された標高から移動して求めている。ただし個別遺構の実測図に磁北を用いている場合があるが、その場合は明記した（明記のないものは国土座標軸北である）。
4. 本書に用いる発掘調査時の遺構実測図の作成は、調査担当者の久住猛雄（当時、埋蔵文化財調査課）のほか、瀧本正志、荒牧宏行、榎本義嗣、星野恵美、大森真衣子、中尾祐太（以上、当時埋蔵文化財調査課職員）、池田祐司（当時、埋蔵文化財審査課職員）、藤野雅喜、板口剛毅、上方高弘（当時、埋蔵文化財調査課技能員）、鈴園さやか、長安慧（当時、福岡大学生）が行った。また遺物実測図の作成は、土器・陶器類を主に上方高弘が行い、一部を山本麻里子、谷直子が行ったほか（以上、埋蔵文化財課技能員）、久住（現、埋蔵文化財課）が全体をチェックし一部を修正加筆、ないし実測を補った。縄文土器は米倉秀紀（文化財活用担当課長）、池田祐司（埋蔵文化財調査課）が実測を行い、弥生時代以前の石器については萩原博文（埋蔵文化財課技能員）が実測を行った。遺構図面の製図は久住のほか、小畠貴子、林由紀子（以上、埋蔵文化財課整理補助員）、上方高弘、山本麻里子、谷直子（埋蔵文化財課技能員）、久住、朝岡俊也（埋蔵文化財課職員）が行った。遺物図面の製図は、井上加代子（埋蔵文化財課技能員）、上方、谷、久住が行い、縄文土器・石器の製図は米倉が行った。なお、各遺構の土層断面図の土層注記については、紙幅の都合上から掲載を省略したものがある。必要な場合には、埋蔵文化財センターに収蔵後、遺構原図を参照していただきたい。
5. 本書に用いる写真は、遺物写真的大部分を除き久住が撮影した。遺物写真是一部を除き井上蘭子（埋蔵文化財課職員）が撮影した。写真是全てデジタルデータのものを使用しているが、報告書掲載にあたり、陰影やコントラストなどに若干のデータ調整加工を行っている。遺構写真については写真画像のオリジナルデータと対応するフィルム写真もあり、あわせて収蔵される予定である。
6. 表表紙写真是 SB101 検出状況（北から）、裏表紙写真是第 2 面調査状況全景（南から）である。
7. 本書の執筆と編集は久住（現、埋蔵文化財課）が行った。ただし「縄文土器」と「弥生時代前半以前の石器」の項は米倉秀紀が執筆し、久住が若干の編集を行っている。
8. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 周辺の地理的歴史的環境	2
II. 調査の記録	9
1. 調査の概要と基本土層	9
2. 検出遺構	18
(1) 第 1 面	18
(2) 第 2 面	42
3. 出土遺物	44

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市早良区梅林7丁目139番1外地内における宅地造成工事の開発事前協議申請に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成26年4月2日付で受理した（事前審査番号26-2-12）。これを受け経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、照会地がすでに埋蔵文化財の有無について照会を受け（事前審査番号25-2-451）、周知の埋蔵文化財包蔵地であるクエノ遺跡（分布地図番号75・84-0269）に含まれていたため確認調査を実施し（平成25年8月8日および10月10日）、埋蔵文化財の存在が確認された地点であり、予定される宅地造成工事は地下の埋蔵文化財に影響を与えるとみられたため、埋蔵文化財の保全等に関して事業者等と協議を行った。

その結果、確認調査の結果と造成工事の計画を照合し、埋蔵文化財への工事の影響が避けられない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで、土地所有者および事業者と合意し、平成26年8月8日付で造成工事対象地の当時の土地所有者で土地の売却予定者であった個人を委託者とし、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結し、同年8月18日から実施することになった。

調査開始後、当初想定していた遺構密度よりも濃厚な遺構が検出され、さらに下面の砂礫層上面にも弥生時代を中心として濃密に遺構が存在することが確認された。そのため調査途中において調査期間について委託者および事業者と協議を行い、調査期間の延長について合意し、かつ下面（第2面）の遺構については発掘調査予定範囲を全面調査するには相応の期間が必要なこと、また検出レベルが深く宅地造成工事による直接的な影響は少ないとから、恒久的構築物となる市道編入予定範囲を前後する部分についてのみ発掘調査を完遂するものとし、これを除いた他の発掘調査予定範囲の下面遺構については未調査として地下に現状保存することとした。発掘調査は平成26年11月1日に終了した。資料整理および報告書作成は、当初は平成27年度に行う予定であったが、協議の上、これを平成28年度に行うことへ変更し、平成29年3月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は次頁上部の表のとおりである。

2. 調査の組織

調査主体： 福岡市教育委員会

（発掘調査 平成26年度；資料整理・報告書作成 平成28年度）

発掘調査および整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（平成26年度）・

埋蔵文化財課（平成28年度） 課長 常松幹雄

埋蔵文化財調査課調査第1係長 吉武 学（平成26年度）

埋蔵文化財課調査第2係長 加藤隆也（平成28年度）

発掘調査および整理・報告庶務： 埋蔵文化財審査課（平成26年度）・埋蔵文化財課（平成28年度） 管理係長 内山広司（平成26年度）・大塚紀宜（平成28年度）、管理係 横田 忍

発掘調査および整理・報告担当： 埋蔵文化財調査課調査第1係（平成26年度）・埋蔵文化財課調査第2係 久住猛雄

＜調査基本情報＞

遺跡名	クエゾノ遺跡	調査次数	4次	調査略号	K E Z - 4
調査番号	1419	分布地図図幅名	075 重留 084 西油山	遺跡登録番号	020269
申請面積	8289.43m ²	調査対象面積	740m ²	調査面積	620.68m ²
調査期間	平成26(2014)年8月19日～11月1日			事前審査番号	26-2-12
調査地地番	福岡市早良区梅林七丁目139番1, 140番1, 140番2, 140番3, 141番1, 141番6, 143番2, 144番, 229番1, 230番1				

3. 周辺の地理的歴史的環境

クエゾノ遺跡は、福岡平野南西にある油山から派生する標高22～40mの丘陵上に位置する。調査地は、その丘陵の南西部、油山川の東岸に位置する。東側の丘陵尾根との間は急峻な斜面だが、西側は油山川に向かう緩斜面の地形である。周囲標高は斜面上の東側で32.2m、中央は31m前後、西縁部は30.5～30.6m前後である。なお東側丘陵上にはクエゾノ1号墳などが存在した。

クエゾノ遺跡の立地する油山山塊からせり出した舌状丘陵は、そのまま北に向かって延び、西の室見川流域（油山川）と東の樋井川流域（七隈川）を画する飯倉丘陵となる。飯倉丘陵には北は飯倉A遺跡から南は飯倉H遺跡までの飯倉遺跡群があるが、クエゾノ遺跡はその遺跡群山麓側の南端の遺跡とも捉えることができる。そこで本報告では飯倉丘陵周辺の遺跡を概観し、まず主に弥生時代を中心概観する。飯倉丘陵遺跡群（飯倉A～H遺跡）はクエゾノ遺跡の北側に連続して3.5kmほどの長さで細長く続く。起伏の顕著な丘陵であり、遺跡がある地点に集中して大規模に展開するものではないが、全体としてみると特に弥生時代後期から終末期には顕著な遺跡群が連続していることが分かる。北端の飯倉A・B遺跡は谷を挟むが連続する丘陵で、生産域を考慮すると一連の集落群と言える。弥生時代後期中頃に集落が成立して終末期まで続く。後期後半から終末期に集落単位が散在したが、古墳時代初頭に急速に衰退する。飯倉丘陵遺跡群北部は海浜部の西新町・藤崎に近く、飯倉丘陵の一部は古墳時代初頭前に海浜部に移転した可能性もある。丘陵中央には飯倉C・D遺跡がある。飯倉Cは弥生時代中期が中期末まで継続するが、後期初頭に一時不明となり後期前葉から集落が再興する。後期中葉から後期後半にかけて遺構が増大し、終末期まで継続する。後期中葉には隣接する飯倉Dの集落が成立する。飯倉Cの分村として飯倉Dが位置付けられる。いずれも丘陵地斜面を段造成して居住地を形成する。飯倉Dも終末期まで継続するが、同様に古墳時代初頭に遺構が激減し、集落が廃絶していく。飯倉C 7次では（未報告）、古墳初頭の屋内カマドが検出され、この時期にカマドが唯一集中する西新町遺跡との往来が推測できる。飯倉C・Dは遺構集中地区があり、飯倉Cは区画溝条溝が検出され（1・5次）、飯倉D 1次では鉄型の出土から青銅器工房が推測される地点があり、同地点では鍛冶工房の存在も推測されている（比佐藤一郎 2007）。飯倉C・Dは、地形の制約から居住区が分散的ではあるが、「拠点集落」としての特徴を備える。飯倉丘陵の南半（飯倉E～H）も弥生時代後期頃の遺構が多い。飯倉F遺跡は、後期前葉から集落があり、後期前葉～中頃の掘立柱建物主体の区域があり（4・5次）、丘陵に進出した指導者層の中心的な集落域だろう。周囲丘陵では後期初頭までの遺構と遺物は希薄であり、某所から移転した集団であろう。飯倉Fは1～3次に後期中頃成立の居住域があり、後期後半から終末期前半まで遺構が増大するが、その終末期後半に衰退する。古墳時代前期は、前期前葉は小規模な集落が続くが、前期中頃以降は断絶する。飯倉Fは、干限D 1号墳（TK47期）の墳丘から弥生後期土器が多く出土し、後期の遺構の一定の広がりが認められる。飯倉Eでは、



A. クエゾノ遺跡 B. 飯倉 H 遺跡 C. 飯倉 G 遺跡 D. 中尾池北遺跡 E. 梅林遺跡 F. 飯倉 F 遺跡 G. 飯倉 E 遺跡 H. 飯倉 A-D 遺跡 1. 次郎丸遺跡群 2. 次郎丸高石遺跡 3. 免遺跡 4. 野芥大蔵遺跡 5. 野芥遺跡 6. 橋本一丁田遺跡 7. 橋本遺跡 8. 有田遺跡群 9. 原遺跡 10. 田村遺跡 11. 四箇遺跡 12. 吉武遺跡群 13. 羽根戸原 C 遺跡 14. 飯倉遺跡群 15. 藤崎遺跡 16. 西新町遺跡 17. 重留遺跡 18. 東入部遺跡群 19. 経浜遺跡 20. 野方久保遺跡 21. 野方中原遺跡 (注) この図はやや古い遺跡分布地図を基礎図に用いているので、現在把握されている遺跡(「周知の埋蔵文化財包蔵地」)の分布状況は異なる部分がある。最新でかつ正確な埋蔵文化財包蔵地の分布については福岡市埋蔵文化財課事前審査係に問い合わせてください。

Fig. 1 クエゾノ遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

「千限古墳」墳丘下に、出土土器と「足元掘込土壤墓」の型式変遷觀から弥生時代後期前半を上限とする、弥生時代後期～終末期の区画墓ないし低墳丘墓があつた可能性が高い(吉留秀敏 1997、ただし吉留は墳墓群を終末期前後とする)。これを覆うように玉類副葬がある箱式石棺を主体とする円墳が前期後半頃に築かれた。周辺埋葬の壺棺の時期が近いと考える。飯倉 E 1次は未報告で詳細不明である。この周囲にも弥生後期集落があるようだ。飯倉 E の一部は、弥生後期以降古墳中期までの飯倉丘陵遺跡群の墓

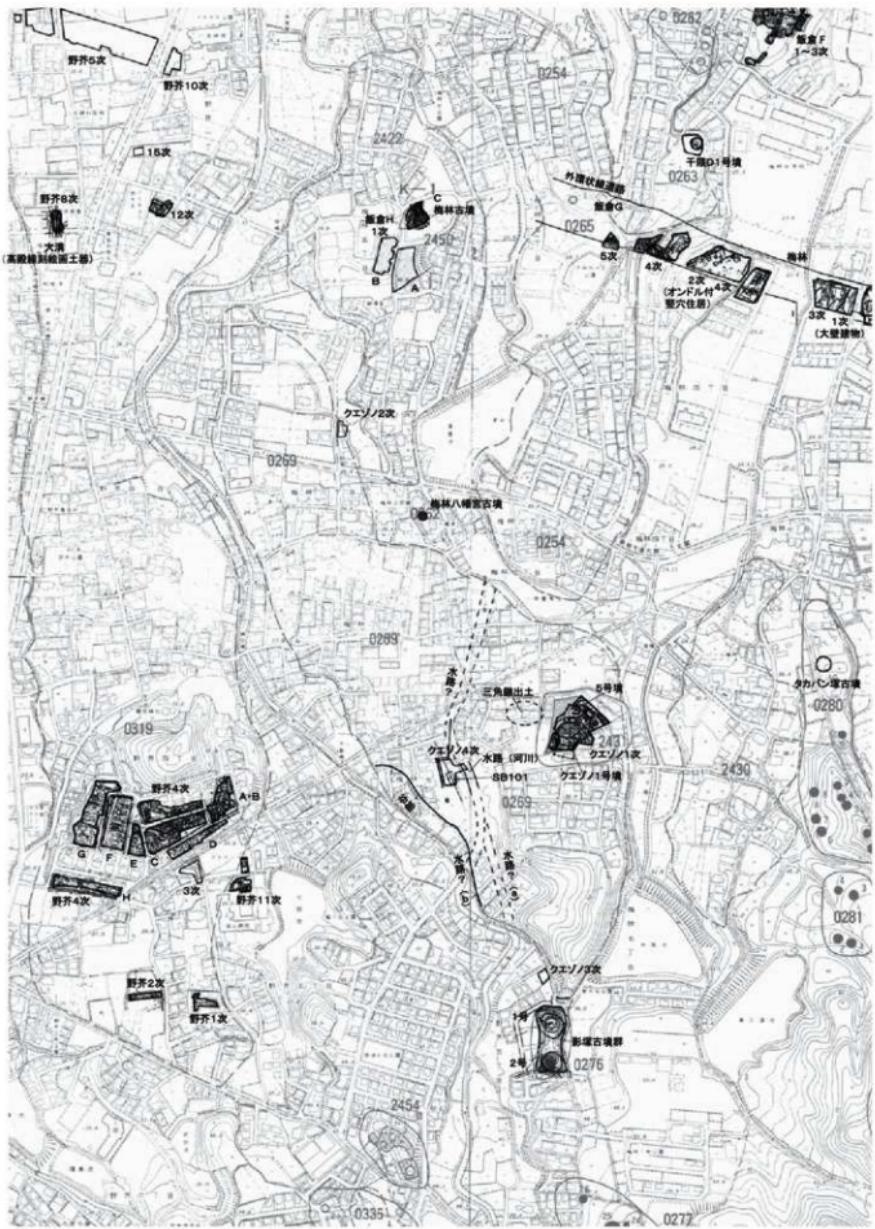


Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/6000)

域の可能性がある。前述した飯倉F・5次の集落は、飯倉丘陵遺跡群の開発拠点的な集落であろう。

この時期前後には、早良平野東部(室見川右岸)の集落群が、弥生時代中期末までは継続しながら、後期初頭から後期前葉にかけて衰退・消滅したという現象がある(井沢洋一 1986)。その原因是、室見川左岸の浦江遺跡群に関して述べたように(久住 2006)、洪水の頻発による水路の埋没や耕地の荒廃にある可能性がまず考えられるが、人口が減少したと同時にその地域の住人が飯倉丘陵に移転して集落を再形成したと考えるのが集落動態からは最も可能性が高い(久住 2010)。飯倉G遺跡は、後期初頭前後に丘陵上に環濠が築かれるが居住城か不詳で遺物も少ない。「逃げ城」的な集落の可能性も含め、「高地性集落」とすべきだろう。僅かながら遺物がその後もあり、壕は再掘削も認められ古墳時代初頭までは維持された。また飯倉Gでは弥生終末前後の墓域があり、土壙墓に小型仿製鏡がある。飯倉H遺跡は梅林古墳の周辺だが、弥生時代中期の甕棺墓地や後期の土器がある。周辺に中～後期の集落が広がっている可能性が高い。

飯倉丘陵南部やクエゾノの丘陵地とは河川を挟んだ西側には野芥遺跡がある。野芥遺跡では5・12次などに弥生時代後期前半や古墳時代前期の遺構がある。弥生中期後半～末の遺構・遺物もあるが、後期初頭～前葉がやや多い。この時期は周囲の室見川右岸では遺構が減少する時期である。しかし野芥も後期中頃には遺構が減少し後期後半以降一時断絶する。飯倉丘陵の集落への移転が考えられよう。油山川を挟んで対応する4次調査でのクエゾノ遺跡の衰退期と同じである。弥生時代終末期に集落が再成立するが、本格的な再興は古墳時代初頭からである。室見川右岸の他の集落も、広域で同様に終末期(新相)に再成立し、古墳時代初頭頃に再興する。これは飯倉遺跡群の衰退期と同時であり、弥生時代後期前葉前後とは逆方向の集落群の移転が考えられる。野芥5次には古墳初頭以降の集落があり、前期後半まで続く。古墳中期初頭は不明確だが、中期前葉から後半までの遺構と遺物がある。野芥8次の水路は古墳時代中期初頭前後に成立したと考えられ、廃棄された大量の土器には中期前葉～中葉があり、咸安系陶質土器や高殿？を描いた絵画土器を作り。最新の水路は中期中葉から後半(初期須恵器～TK208期)で、水路群の土器廃棄から想定される野芥遺跡集落の終焉は梅林古墳の成立(TK47期)よりは早く、両者を直接結びつける見解(濱口麻衣 2014)はやや問題がある。梅林遺跡は、飯倉G遺跡のある丘陵から北東に派生した低丘陵上に立地する。ここでは、オンドル付きカマドを有する堅穴住居群や大壁建物が多くを占める建物群が検出され(古墳時代後期中葉～後半、TK10～TK43)、渡来系(朝鮮半島系)文化要素が指摘され、後者は後期後半(MT85～TK43)期の首長層の居住域の可能性があり、半島系渡来人を傘下におさめていたものだろう。この首長層の拠点に対応する首長墓は、後述するように七限古墳群A-5号墳、タカバン塚古墳(いずれもMT85期築造)がある。他に飯倉F遺跡では弥生後期中頃から古墳前期前半に継続する集落があったが、その後中期(5世紀)代にも堅穴住居や掘立柱建物群(総柱建物=高床倉庫)が展開する。「堅穴外溝建物」(III区2号住)があり、同時期(古墳中期)の吉武遺跡群や時期的に後続する梅林遺跡など渡来人と関わる遺跡が多く、飯倉Fもその可能性がある。また南側100mには集落の存続期間内の干限D1号墳(TK47期)があり、集落と古墳の対応が指摘される(濱口 2014)。

周囲の油山山麓には古墳が多く分布し、宅地化された範囲の多くは残っていないが、丘陵部を中心とし今多くの古墳が残る。飯倉H遺跡には梅林古墳があり、横穴式石室を主体とする全長27mの前方後円墳である。中期末(TK47)期に造営され、後期前葉(TK10)までの追葬がある。飯倉丘陵の周囲には、小規模な前方後円墳を含む首長墓と目されるものが存在する。飯倉丘陵の東側を画す七限川流域の古墳から首長墓と目されるものを抽出していくが、一部西側の早良平野側(油山川流域)の古墳もあげていく。梅林八幡宮古墳は未調査であるが、径18m前後の円墳である。2006年頃に墳丘の一部

が削り取られた後に断面を観察する機会を得たが（現在は墳丘が半裁状態になっている）、墳丘高の半分前後の地山整形の上に盛土がなされている。精査できていないので不明確だが、石材は無く木棺直葬と考えられ、前期古墳だろう。単独立地であり、首長墓と考える。タカバン塚古墳は駄ヶ原古墳群の最も北側の丘陵支丘上で単独的に立地し（A10号墳）、規模は径19×16m程度だが古墳群中では大きく、馬具や胡蝶または銅金具の出土から盟主墳と考えられる。6世紀第3四半期（III A期新相=MT85）の築造。同じ頃に飯倉丘陵南部のクエゾノ遺跡のある丘陵部を挟んで西側にも盟主墳がある。影塚1・2号墳であるが、いずれも径16~17m前後、時期はIII B期の幅内で相次いで築かれた。1号墳の高杯が2号墳の高杯よりやや新しい特徴があること、2号墳が複室構造であること、1号墳の玄室比が長いことから僅かに1号墳が先行する。他の古墳群と離れた2基のみの築造で、かつ合わせると前方後円墳状の外觀になる首長墓的な占地・様相である。干隈古墳は前述したように墳丘下に弥生後期～終末期の低墳丘墓があった可能性が高い（吉留秀敏 1997）。この上に盛土され、組合式箱式石棺を主体とする径24mの円墳が築かれている。盜掘があり副葬品は玉類9点のみだったが、出土した碧玉製管玉は両面穿孔で、そう新しくはならない。南側の周辺埋葬に山陰型壺の甕棺があり、前期後半～末であり、主墳もこの時期であろう。さらに南側には滑石製勾玉・臼玉を副葬した土壙墓があり、これはやや新しく古墳中期前半である。この300m南側には干隈熊添2号墳がある。前方後円墳説もあったが、近年の確認調査でその可能性は薄くなった。しかし円丘部とされた円墳は径19mと大きく、この小地域では首長墓級であろう。低墳丘で墳頂平坦面が広く前期古墳ないし中期前半までの可能性がある。おそらくは干隈古墳に後続する中期初頭～前半の古墳と推定しておく。干隈熊添1号墳はこの南にあり、径13mの円墳で小規模だが、幅広の石室（クエゾノ5号などに類似）を二つ並列して築造し、長剣や鐵鏃の束、飾金具を出土した。中期末（TK23）の築造で、首長層の一角を占めるだろう。クエゾノ1号墳は、くびれ部を明瞭に検出していないものの、地山整形の状況からは前方後円墳として間違いない。全長28m以上。主体部は石蓋木棺墓ともいべき第1主体と箱式石棺である。前者は盜掘を受けていたが、石棺は縁泥片岩製の勾玉1と管玉23があり、人骨が残り女性被葬者と判明した。初期須恵器でも特異で在地的（？）な大甕と壺類が出土しているが、坏蓋があり中期中葉（TK216）頃だろう。飯倉丘陵にも古墳群があり今はほとんど残らないが、丘陵北部の飯倉Bには飯倉1号墳が残る。周囲が削り取られ墳端は残っていない可能性が高いが、明確な墳丘の高まりがあり墳頂平坦面が広く、部分的な調査からほぼ地山整形の墳丘で上部のみ盛土が確認された。さらに周囲の測量から前方後円墳の可能性が指摘される（福岡市埋蔵文化財年報 Vol.20）。全長30m前後と考えられる。玄武岩板石片があり、箱式石棺か竪穴式石室の存在が示唆され、前期古墳だろう。飯倉丘陵の西側にある七隈古墳群A群6号墳は径22m前後と大きく、後期前葉（TK10）頃の首長墓とみられ、続く後期中葉（MT85）の5号墳も径16mとやや大きい。倉瀬戸古墳群A4号墳も径17.6mと同時期（III B期）では大きい。七隈古墳群A群のさらに西側には、小袖古墳（径14m以上、TK23期築造）、首塚古墳（径17m、小袖古墳の後続でMT15～TK10期か）があり、七隈A群の造営主体の前身の可能性がある。小袖古墳には梅林古墳にあるような鳥足文タキ壺など韓半島全羅道系の陶質土器が複数あるという（濱口2014）。以上、前期から中期前葉までの古墳として梅林八幡宮、飯倉1号、干隈、干隈熊添があり（順序は不明確だがこの順序だろう）、中期中葉以降は、クエゾノ1号（中期中葉=初期須恵器併行期）→梅林（中期末～後期前葉=TK23初葬～TK10追葬）、後期は七隈A6号（TK10=III A期古相）→同5号・タカバン塚（MT85=III A期新相）→倉瀬戸A4号、影塚1・2号（TK43=III B期）、といった首長墓ないし盟主墳の系譜が考えられる。盟主墳の傘下の有力古墳として、干隈D1号、小袖、首塚が中期末から後期前葉にある。後期中頃～後半（MT85～TK43）は、群集墳の盟主クラスが並立した可能性があ

るが、その中でもやや傑出する存在のタカバン塚や七隈A 5号は首長墓の可能性があり、梅林の大壁建物群の成立・展開時期と同時期であることが注意される。

クエゾノ遺跡は飯倉丘陵遺跡群の南にあるが、調査の歴史は浅い。しかし1973～1974年頃に中国製漢式銅鏡（三角鏡）が採集され、それが学界で知られており、周囲に弥生時代の遺跡群があるのではという認識はあった（吉留秀敏・茂和敏 1992；註1）。その後、宅地造成に伴い1992年に最初の発掘調査が行われた（クエゾノ遺跡1次調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第420集）。1次調査地点は、今回の4次地点から東側約120mで一段高い丘陵尾根線上にあり、古墳時代中期の前方後円墳（クエゾノ1号墳）や、それに続く小古墳群や小石室群、飛鳥時代の可能性がある箱型製鉄炉などの製鉄遺構などが検出された。1号墳はすでに触れたが、他の古墳も注目すべき内容がある。2号墳は周溝から陶質土器の大甕が出土し、築造は1号墳と同時期と思われるが、石室の須恵器壺類は新しく（MT15-TK10）、長い追葬が考えられる。5号墳（TK23-TK47）は特異な幅広の石室から鉄製鍛冶具（鉄鉗、鉄鎬）と鉄素材の朝鮮半島系鋳造鉄斧2点、飾弓金具などが出土した。石室の様態や鋳造鉄斧の出方は吉武S27号墳に類似し、渡来人の関与が推定される古墳群である。クエゾノ2次は遺跡範囲の北側で調査され、古墳時代後期～飛鳥時代の堅穴住居跡、奈良時代の溝と掘立柱建物が検出されている。古代の溝には鉄滓が伴い、1次調査のような製鉄遺構が遺跡北側にも存在する可能性がある。3次調査は遺跡の南端で行われ、中世の溝を検出した。以上のように、これまでクエゾノ遺跡は古墳時代から古代までの遺構が主体と考えられていたが、今回の4次調査で弥生時代の拠点的な集落の存在が想定できることになった。クエゾノ4次は遺構と包含層から弥生時代中期前葉から後期前葉までは多いが、後期中頃に減少し、後期後葉から古墳前期は遺構と遺物は存在するものの激減している。後期中頃には、丘陵北部の飯倉丘陵遺跡群（A～F）に人々が分散移転したとみられ、地域の中心はクエゾノから飯倉Fに移ったのだろう。その後の古墳時代は断続的に人の生活痕跡があるが、クエゾノ遺跡全体で古墳時代後期から飛鳥時代、奈良時代の遺構と遺物がある。飛鳥時代末ないし奈良時代の陶硯が4次調査で複数点出土したことは、官衙関連施設ないし官人層の居住区の可能性を考えうる。ただし当該時期の顕著な掘立柱建物や区画施設は今回の調査区では検出されず、現状では官人層の居住区の可能性の方が考えやすい。クエゾノ4次から西側300m前後の野芥4次調査区は、大型掘立柱建物を含む飛鳥～奈良時代の遺構分布状況や円面硯や刻字須恵器の存在から、古代の「能解郷」に関する何らかの官衙施設の存在が想定されており（福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集）、そこに通う官人層の居住区として考えたい。また今回の調査でも飛鳥時代以降の遺構面で鉄滓が出土している。鉄滓は飯倉Eの範囲内の熊ソイ池東斜面で採集できるほか、飯倉A 2次、飯倉F 5次などで精錬滓が出土し、また古墳に供獻される例も周辺にあり、古墳時代後期以来、製鉄集團がこの地に存在していたのであろう。

（註1）吉留・茂 1992 では遺跡群北半の梅林6丁目の出土としているが、その後茂和敏氏に4次調査の際に現地で出土土地を確認したところ、クエゾノ1号墳の東側の宅地付近の断面だったという記憶を確認した。また前掲論文にあるように、土壙墓や木棺墓などの棺底から銅鏡が一括出土した可能性が高い。＜引用文献＞井沢洋一 1986 「早良平野における集落の立地と変遷」『早良王墓とその時代』福岡市歴史資料館／久住猛雄 2006 「(4)まとめ」（浦江遺跡群第5次調査2区の調査）『金武3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第874集／久住猛雄 2010 「弥生時代後期の福岡平野周辺における集落動態（一）-近年の研究動向の批判的検討から-」『市史研究ふくおか』第5号／濱口真衣 2014 「油山山麓における堅穴式横口式石室の展開と基盤集落」『七隈史学』第16号／比佐陽一郎 2007 「福岡市飯倉D遺跡出土鉄器の再検討」『九州考古学』第82号／吉留秀敏 1997 「桶井川流域の大型古墳と首長系譜」『桧原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第540集／吉留秀敏・茂和敏 1992 「福岡市クエゾノ遺跡採集の中国製銅鏡について—日本出土の中国製三角鏡の検討—」『古文化叢叢』第27集

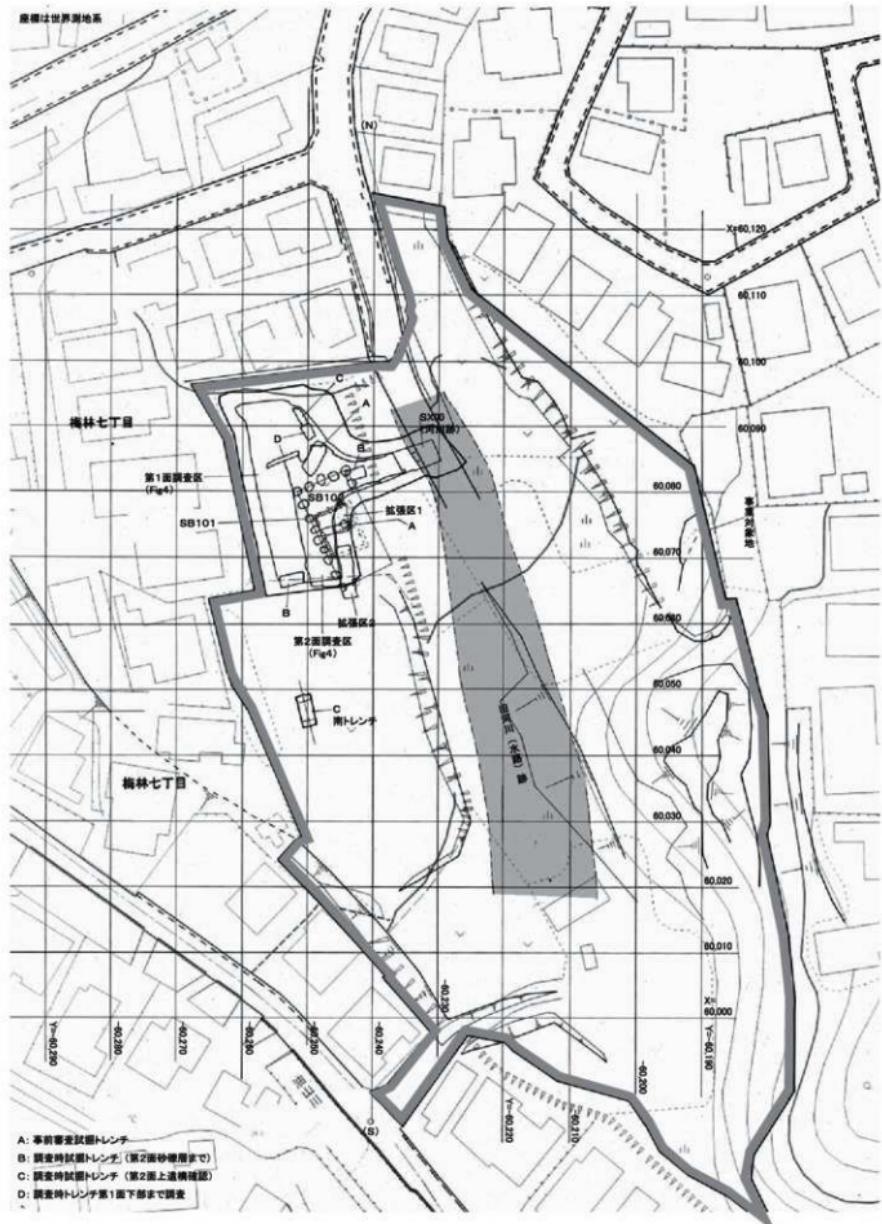


Fig. 3 クエゾノ4次調査区の位置と事業対象範囲図 (1/750)

II. 調査の記録

1. 調査の概要と基本土層

クエゾノ遺跡4次調査地点は、遺跡の所在する丘陵の中央西南側、油山川の東岸に位置する(Fig. 1・2)。東側丘陵尾根との間は南側では急峻な斜面だが北側ではやや緩やかになる(Fig. 3)。西側は油山川に向かう緩斜面地形で、調査前の現況北側は高低差が大きく西に向かって段造成がされていたが、南側は比較的緩やかな斜面であった。また調査区東側のSX100と開発対象地の造成工事における掘削地点の観察から(砂層堆積部分がFig. 3のアミかけ部分を延びるように認められた)、対象地中央に旧河川(水路)跡が埋もれていることが判明した。この「河川跡」はいかにも不自然に丘陵斜面に平行して走行しているとみられ、地形(標高)からすると、走行方向は北→南の可能性があり、地形や河川は大きくは南→北に下るがその逆であり、ある時点での人工的な水路掘削が考えられる。さて調査範囲は東側に一部突出した「凸」字状で(Fig. 4)、周囲標高は32.2m~30.5m前後であった。遺構は現況地表から比較的深いレベルで検出された。西が高く東に低い斜面堆積のため場所により異なるが、近年の

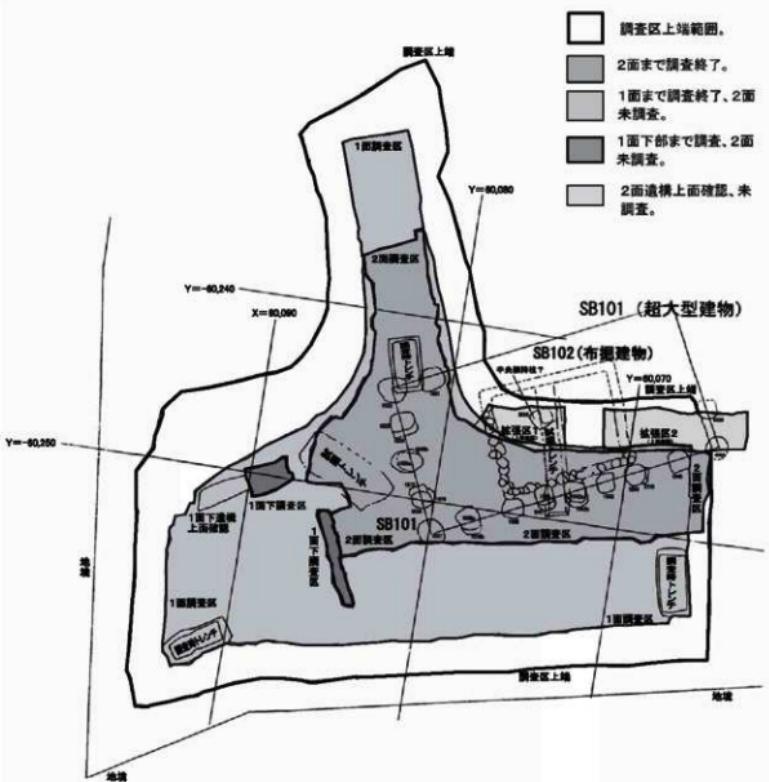
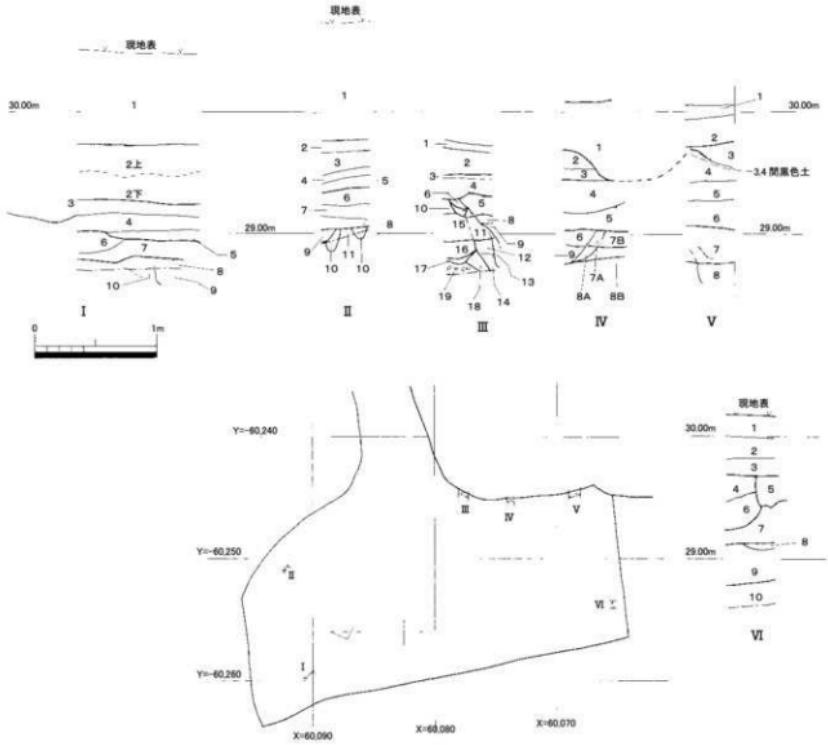


Fig. 4 調査区全体概要図 (縮尺任意座標参照)

盛土を除去すると旧耕作土層となり、その下部に二次的堆積の暗褐～黒褐色土の遺物は少ない包含層となり、その下部のにぶい褐色～灰褐色砂質土上面で遺構を検出した (Fig. 6・PL. 5-4~7, Fig. 8上段)。この遺構検出面の標高は、調査区東側端で 30.1m (西に下る)、中央東側で 29.3~29.4m、北西隅で 29.2~29.3m、南西隅で 29.1~29.2m である。この面を第1面とし、検出遺構は飛鳥時代末以降中世までである (Fig. 5)。ただし、重機掘削の際に下部の黒褐色土「包含層」まで下げすぎた部分もあり、一部では弥生時代中～後期の土器窓上部なども検出している。第1面基盤のにぶい褐色～灰褐色砂質土、一部橙色土層には飛鳥時代後期～末期 (VI期) の遺物を包含する整地層の可能性があるが (この「整地層」の凹凸にVI期新相の土器窓がある)、この下部には黒褐～極暗褐色土「包含層」が検出される。



Fig. 5 第1面全体図 (1/160)



調査区壁面土層Ⅰ～VI注記

土層Ⅰ

1. 客土
2. 上土、2. 50cmの、上下の明瞭な区別

2下. 粘土土、少々砂質、床土
含む。

2下. 粘土土、下部2.5mは少しあり。
上部0.4mは粘土土、上部含む。

3. 10B3/2-3.2砂質土、少々粘土土
含む。

4. 10B3/1砂質土、少々粘土土含む
+
10B3/6砂質土ブロック(5層)含む

5. 7.5B3/4-2砂質土、褐色化土
含む。

6. 7.5B3/4-2砂質土、褐色化土
含む。

7. 10B3/2砂質土、少々粘土土、黒褐色土ブロ
ック+鐵70%以下。

8. 10B3/4-4砂質土、少生土源土含む

9. 褐色土、少生土源土含む

10. 10B3/4砂質土、純大風化層(～堆生?)
含む。

11. 10B3/2砂質土

4. 10B3/1(砂質)シルト
5. 10B3/2砂質土(3と同じ)シルト
6. 10B3/1砂質+少々粘土土

7. 10B3/2(砂質)シルト質

8. 10B3/3砂質土(褐色粘土で埋れ)
9. 10B3/4(3-4)砂質(少々粘土)シルト

10. 10B3/4砂質シルト、少生土源土
11. 10B3/6砂質土、純大風化層(～堆生?)
含む。

土層Ⅲ

1. 粘土土、10B3/2-6.3砂質(～少々粘土)
2. 10B3/2砂質土(少々粘土)上

3. 10B3/2-4.3砂質(少々粘土)土
4. 10B3/5砂質土。しまりあり、土層Ⅰ-2
層と同様。

5. 10B3/3(1-3.2)砂質シルト、しまりあり、
少生土源土含む

6. 10B3/4砂質土
7. 10B3/4(2.5-)(2.5-)-10B3/4砂質土
8. 10B3/4砂質土、少生土源土含む

9. 7.5-10B3/4砂質土、少生土源土含む

10. 7.5-10B3/6砂質土、少生土源土含む

11. 7.5B3/4砂質土、少生土源土含む

12. 7.5B3/4砂質土

13. 10B3/2砂質土

14. 7.5B3/4-4砂質土
(12-SP1000)

15. 7.5B3/4砂質土、少生土源土含む

16. 7.5B3/4砂質土

17. 7.5B3/4砂質土

18. 7.5B3/4砂質+鐵少し

19. 7.5B3/4-6.5砂質+鐵少しき、地山?

(純粘土層)

20. 7.5-10B3/4砂質シルト

6-10層=砂質でもらう

土層Ⅴ

1. 10B3/1砂質(少々粘土)土

2. 10B3/4砂質(少々粘土)土
(1-2層)上から

3. 10B3/6砂質土(少々粘土)上
(3-4層)上から

4. 7.5B3/6-7.5B3/5砂質土

5. 7.5-10B3/10-10B3/4砂質土

6. 7.5-10B3/4-7.5B3/3砂質シ
ルト土

7. 7.5B3/4-3/2シルト+粘土

8. 5-7.5B3/3シルト(8P229後)

土層VI

1. 10B3/2砂質(少々粘土)土

2. 10B3/4砂質(少々粘土)土

3. 10B3/6砂質土(少々粘土)土

4. 10B3/5砂質土、しまりあり

5. 10B3/2砂質(少々粘土)土

6. 10B3/5砂質土、しまりあり

7. 10B3/4砂質土、しまりあり

8. 10B3/8砂質土

9. 10B3/2(少々粘土)土

10. 10B3/5(少々粘土)土

Fig. 6 調査区壁面土層図 (1) (S = 1/40)

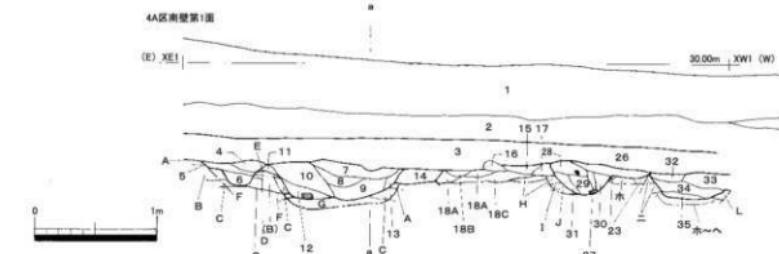


Fig. 7 第2面調査平面図 (1/25)

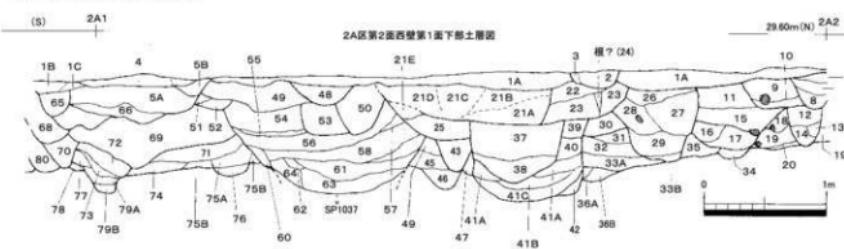
この包含層は斜面上方となる調査区東側では薄くなるが、調査区のほぼ全面にあり遺物が多く検出された。包含遺物は弥生時代から古墳時代、一部飛鳥時代までがあるが、多くは弥生時代中期～後期である。「包含層」の多くは、土層の検討から斜面堆積の上に遺構が濃密に重複したものである (Fig. 8 下段・PL. 8-7、Fig. 10・PL. 8-5、Fig. 13 下段・PL. 8-4、Fig. 25)。そのため実際は、次の「第2面」との間に少なくとももう1面の遺構調査面（「第1.5面」）を設定すべきであったが（調査中に「1A・B区トレンチ（PL. 7-15, 16）」、「2B区トレンチ（PL. 7-14）」、「3A区トレンチ（PL. 8-2）」、「3区南トレンチ」および試掘17トレンチの精查（PL. 8-3）でその面を確認している）、事前の試掘調査による認識では「第1面」自体が明確に認識されず、遺構の集合体である「包含層」が主な調査対象とされており、また次の「第2面」も同様に想定されていなかった。そのため調査予定期間などに余裕がなく、協議により調査期間を若干延長することになったものの、やむを得ずこの間は一部を除き重機で掘削して「第2面」の調査に移行せざるを得なかつた（1頁「調査に至る経緯」参照）。なお確認調査時点では、各トレンチの掘削深度が深く安全性から下に降りて精査することができず、「第1面」はおそらく客土下の旧表土から比較的浅いレベルに遺構面があるとは思わなかつたらしいこと、また黒褐色「包含層」状部分は遺構として認識するのは確かに難しかつたと思われる。しかし本調査地点のような斜面地形では遺物が多く出土すること自体、どこかに遺構群が形成されているものと疑うことが必要であり、さらにトレンチ最下部（砂礫層上面）の写真には遺構が見えている部分もあり、今後の同様な地形での確認調査では、単なる斜面堆積層と判断するまでに慎重な判断が望まれよう。

本調査における第1面の下部では、黒褐色～極暗褐色土「包含層」の下部のにぶい褐色～にぶい黄褐色砂礫混入砂質土層上面で遺構が明確に検出できたため、これを「第2面」として遺構を検出した (Fig. 7)。これは調査初期に調査区内の3ヶ所（「北西トレンチ」、「4A区トレンチ（PL. 8-1）」、「南西トレンチ」）を設定し (Fig. 5)、また確認調査時の試掘トレンチ（「旧17トレンチ」=PL. 8-3）を精査して第2面の存在を確認したことによる。しかし2面の遺構面の存在は基本的に想定外であったため第2面は全面調査が出来ず、市道編入部分のみ調査し、他は一部トレンチ調査したが多くを未調査として残した（1頁「調査に至る経緯」参照）。この第2面の標高は、東側で 29.8m、中央で 28.6～28.8m、南側で 29.0m前後、北側で 28.5～28.7mである。大部分の遺構は弥生時代中期～後期だが、古墳時代前期～後期や飛鳥時代の遺構も認められ、一部に绳文時代後晩期の可能性がある遺構もあった。上記のような層位状況があるので、この面で検出した弥生時代までの遺構は上部が削平されたものであり、重機掘削の過程で消失した遺構も多いと推定されるが（調査区壁面土層からそれが分かる）、それでも相当な密度の遺構分布であった。また第2面基盤の砂礫混入層は、遺物は少ないが绳文時代包含層（早期～後期）でもあった。なお発掘調査範囲は事業対象地で、開発工事の影響が直接的に及ぶごく一部であり (Fig. 3)、事前の確認調査試掘トレンチのいくつかや、調査区南方に設定した「南方トレンチ」 (Fig. 9 下段・PL. 7-13) から、調査区より南側には帶状に遺構群が続くものと見られる。

調査では、杭打ちによる正式なグリッド設定以前に遺構検出中の第1面上部の遺物を空間的に分ける必要があり、調査の便宜上仮グリッドを設定している (Fig. 5)。調査グリッド（座標）は、国土座標によつたため、地形区画に合わせた仮グリッドに実際的な便宜性があり、第2面に下げる際の包含層遺物も仮グリッドで分けている。第1面の検出遺構は飛鳥時代末～奈良時代・平安時代初期（古代）、平安時代末期～鎌倉時代（中世前期）の溝、土坑、石敷遺構、石組遺構（「磐座」？）、列石状遺構（堤状遺構基部）、柱穴多数である。溝には調査区北側で鎌倉時代の方形区画となるものがあり、この内側では土坑状の大型柱穴や石敷遺構があった。古代の遺構は土坑や柱穴多数があるが、大きな柱穴はない。掘立柱建物はいくつか想定できたが、あまり明確なものはなかつた。しかし明らかに柱痕があるもの（PL. 7-11）、柱抜き跡のあるもの（粘土が充填されるものもある、PL. 7-12）、根固め石がある



4 A区南壁第1面まで土層



2 B区第2山西杏花村北部西壁土层

Fig. 8 4A区南隣第1面 上部土層図 2A区第2面 西隣第1面 下部土層図 (S=1/40)

もの(PL. 7-10)などもあり、柱穴群であることも間違いない。一段高い調査区東側には巨石を中心とした石組造構があり祭祀遺構(「磐座」)だろう。この東側に南北に延びる列石状造構があつたが、土堤状造構の下部構造と判断した。その東側は砂層堆積の旧流路があつた。第2面(検出面が少し高く礫混入層より上の「第1面下部」も含む)では、主に弥生時代、一部古墳時代~飛鳥時代前期まで

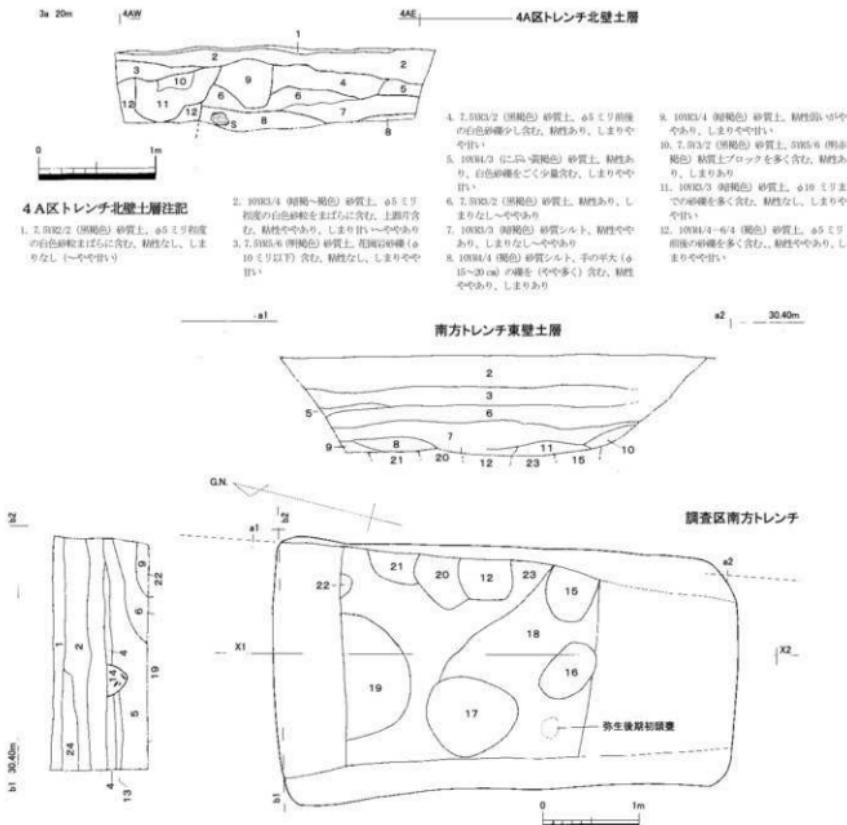


Fig. 9 4A区トレーニング北壁土層図 (S=1/40), 南方試掘トレーニング平面図・土層図 (S=1/50)



Fig. 10 4A区北壁西側第1面下 SX891-892土層図 (S=1/40)

の土坑、柱穴多数、竪穴建物、さらに縄文時代の集石遺構を検出した。古墳時代後期から飛鳥時代遺構は、第1面直下で本来は検出できる遺構の深いものが残ったものである。第2面柱穴は掘立柱建物が復元できるものが多くある。特筆すべきは径100~130cmの土坑状大型柱穴が並ぶ4×8間、8.3m×16.8mの超大型掘立柱建物SB101である。調査終了時の「拡張区」での上面確認により中央棟持柱が認められ、建物形式の類例や重複関係および柱穴出土土器から弥生時代中期末~後期初頭の可能性が高い。他にも多くの建物が想定され、SB101に先行するものが多いが弥生時代の中後後出するものもあり、一部は古墳時代後期から飛鳥時代の建物もある。SB101の北側から北西側には、弥生土器片(中期~後期)が多数含まれる土坑や竪穴建物が密集していた。超大型建物やそれに前後する多くの弥生時代建物群に關係する可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、古式土器師、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産陶器、輸入土器等である。

(Fig. 11 SD001土層およびSD002土層①・②土層注記)

SD001土層 (1区南側土層) 注記

1. 100cm×2~2.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。(100cm×2~2.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか)
2. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
3. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・小礫・しまりややか。
4. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・細砂・しまりややか。
5. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
6. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
7. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
8. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
9. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
10. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
11. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
12. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
13. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
14. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
15. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
16. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
17. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
18. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
19. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
20. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
21. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
22. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
23. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
24. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
25. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
26. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
27. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
28. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
29. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
30. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
31. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
32. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
33. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
34. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
35. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
36. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
37. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
38. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
39. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
40. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
41. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
42. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
43. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
44. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
45. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
46. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
47. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
48. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
49. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。
50. 100cm×2~3.5mの砂質シート+粘土・粗砂・しまりややか。

SD002土層 (1区東側土層) 注記

1. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
2. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
3. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
4. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
5. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
6. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
7. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
8. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
9. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
10. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
11. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
12. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
13. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
14. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
15. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
16. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
17. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
18. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
19. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
20. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
21. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
22. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
23. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
24. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
25. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
26. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
27. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
28. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
29. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
30. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
31. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
32. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
33. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
34. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
35. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
36. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
37. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
38. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
39. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
40. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
41. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
42. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
43. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
44. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
45. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
46. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
47. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
48. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
49. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
50. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。

SD002土層 (1区東側土層) 注記

1. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
2. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
3. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
4. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
5. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
6. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
7. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
8. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
9. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
10. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
11. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
12. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
13. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
14. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
15. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
16. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
17. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
18. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
19. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
20. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
21. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
22. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
23. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
24. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
25. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
26. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
27. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
28. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
29. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
30. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
31. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
32. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
33. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
34. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
35. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
36. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
37. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
38. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
39. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
40. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
41. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
42. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
43. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
44. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
45. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
46. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
47. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
48. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
49. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。
50. 100cm×2~3.5mの砂質シート・砂質シート+粘土・しまりややか。

表: Fig. 11 SD001土層図 b1-b2, SD002土層図 c1-c2, d1-d2注記

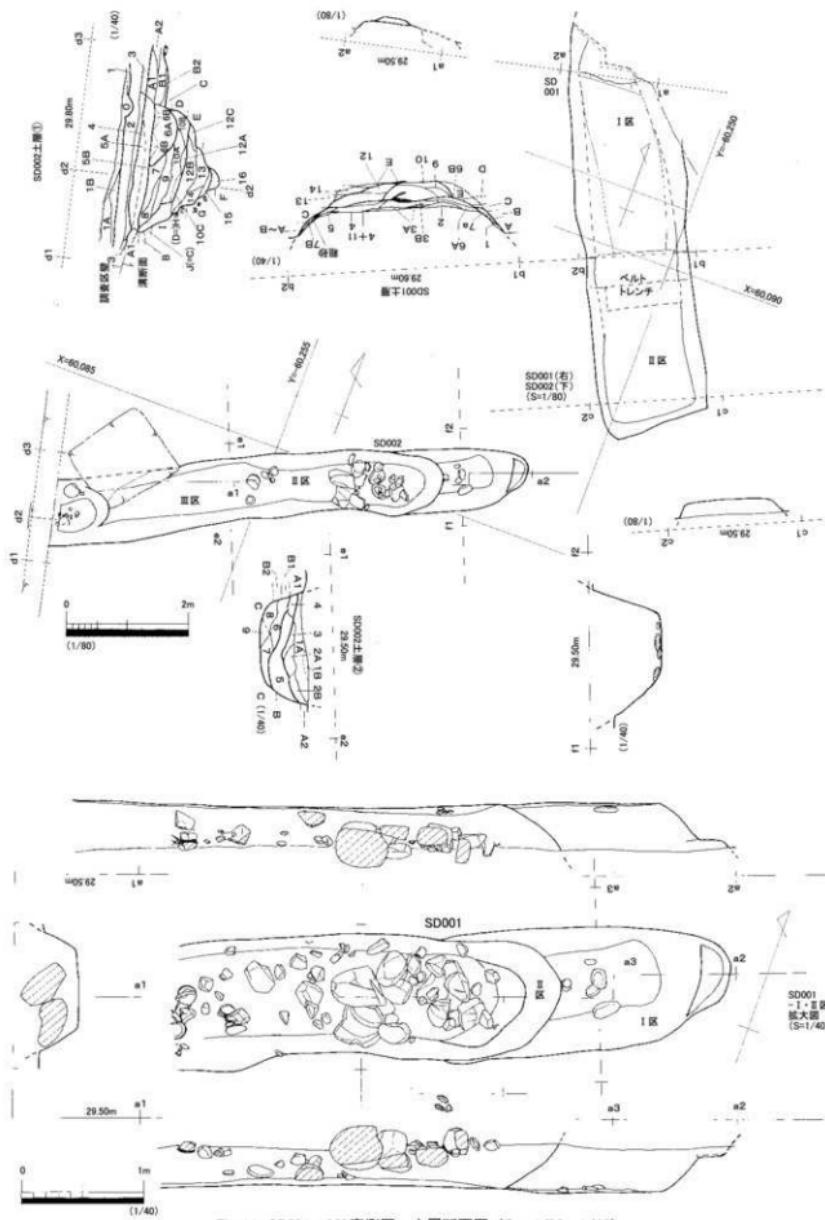


Fig. 11 SD001・002実測図・土層断面図 ($S = 1/80, 1/40$)

入陶磁器（白磁、青磁）、陶硯（円面硯）、縄文時代から弥生時代前半期の石器、砥石などの石製品などである。総量は土器・陶器等が80箱、石器・石製品が2箱である。土器には朝鮮半島系の無文土器（粘土帶土器）、三国時代の瓦質土器（「陶質」とするには軟質なもの）、さらに楽浪土器の可能性があるもの（須恵器の可能性もある）もある。飛鳥時代末頃の陶硯が2点出土したことでも特筆できよう。

2. 検出遺構

以下、主要な検出遺構について報告するが、紙幅の都合上から簡潔な記述に留める。

（1）第1面（Fig. 5）

S0001 (Fig. 11, PL. 1-2, PL. 6-5, 6) は調査区北側で検出。7m以上で北に続き、南側は立ち上がり。幅1.6~1.8m、検出面からの深さ25~30cmだが、北側調査区壁面を観察すると検出面より上部に溝堀沿時の砂層堆積がある。断面逆台形。底面は当初積物が出土し続けるので掘削したが、

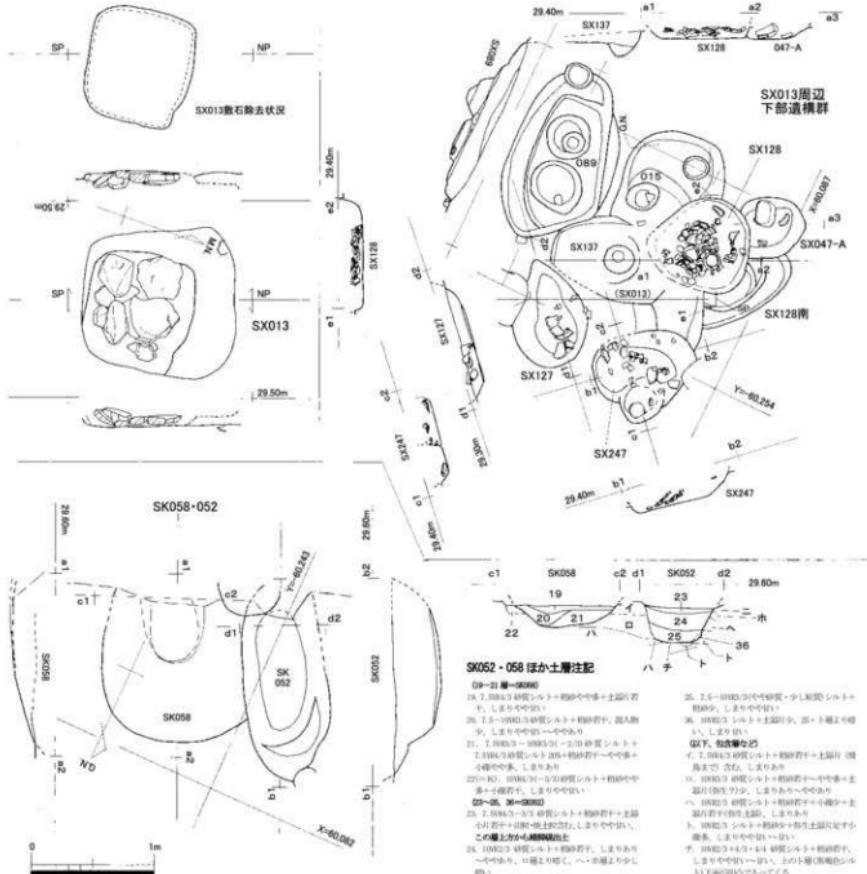
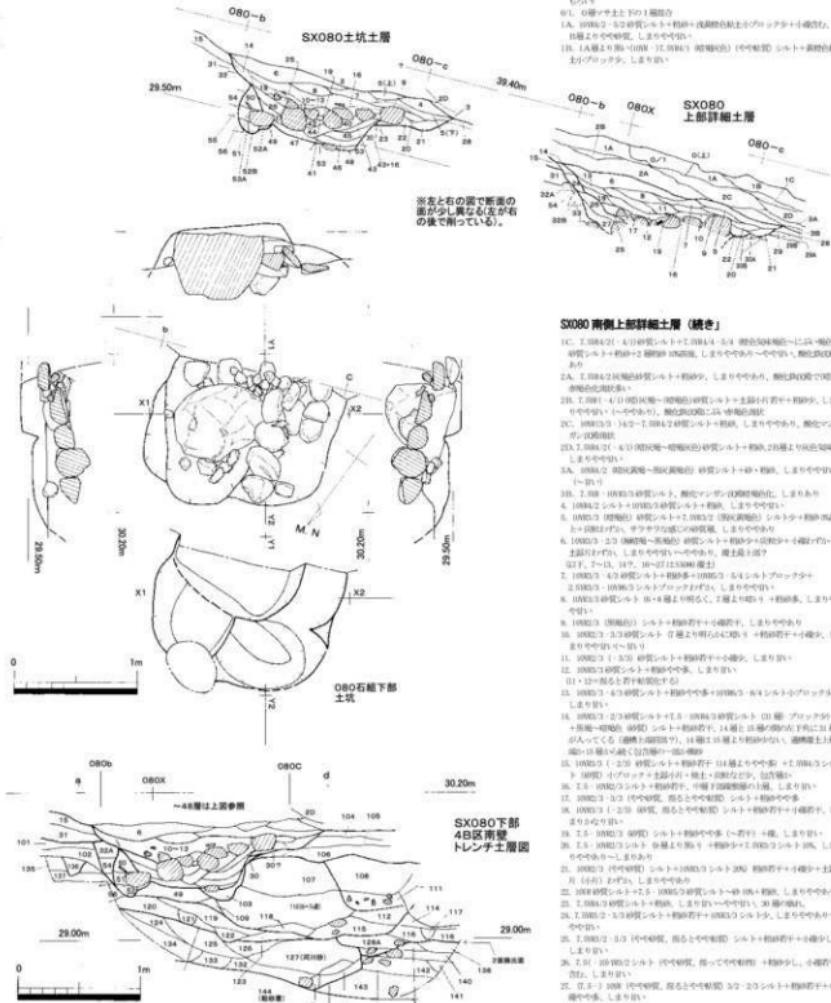


Fig. 12 第1面石歛遺構・土坑(SX)・土層断面図 (S = 1/40)



SX080 下層（中層下部礫層以下「下部土坑」）

土層注記 (圖左上)

130-134

※SKS60 下部包含層（49、53～56 層）および最左下「4B 区南壁トレンチ」土壠注記は 21 頁上。

Fig. 13 SX080石組遺構（盤座状遺構）実測図・土層断面図。SX080下部4B区1面下トレントチ土層図（S=1/40）

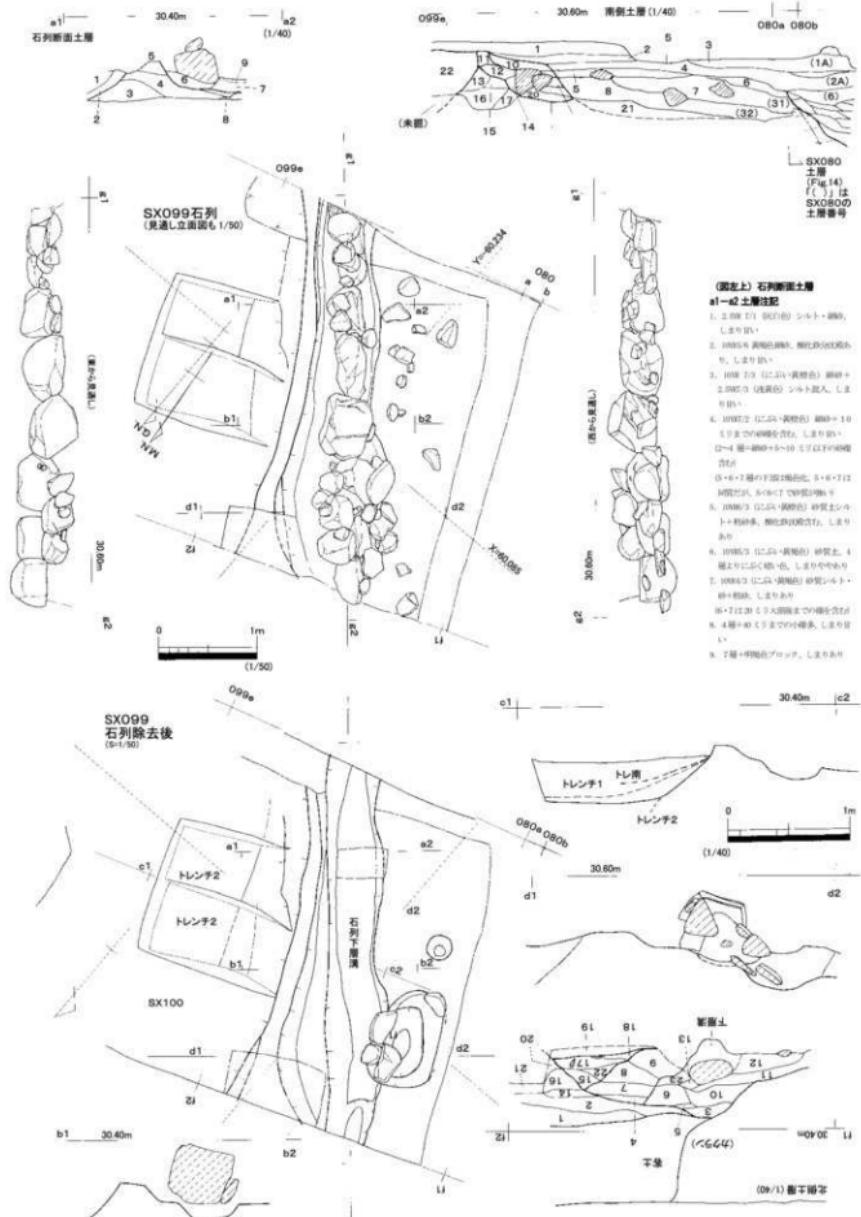
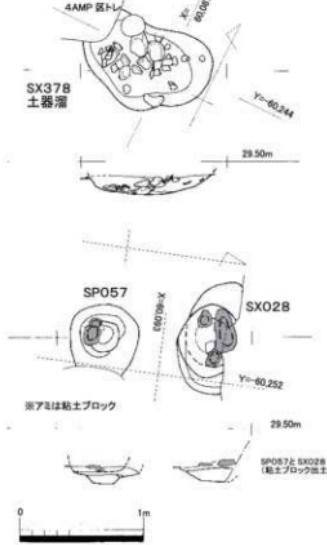


Fig. 14 SX099石列(堤)・実測図・立面図(S=1/50), 断面図・土層図(S=1/40)

Fig. 13 SX080 下部包含層土層注記, SX080 下部 4 A 区南壁トレンチ土層注記

(Fig. 13 左上) SX080 下部包含層土壤



1A・1B区トレンチ北壁土層注記

10. 30-7, 30W4 油膜シート+耐候性シリコンゴム+30W4
11. 30-7, 30W4 油膜シート+シリコーンゴム

12. 30-7, 30W4 油膜シート (耐候) シリコーンゴム+土
壁シート, シリコーンゴム

13. 30W4-4 油膜シート+耐候性, しまりやさり

14. 出版社の研磨シート+耐候性セラーフー, しまりやさり

15. 3M9002-2-3 油膜シート+耐候性セラーフー+セラーフー
壁シート, しまりやさり (中性)

16. 3M9004-4-12 油膜+耐候性シリコンゴム+耐候性
3M9003-2-2 油膜+耐候性シリコンゴム+しまりや
さり 1

17. 施工法 (3+3) 耐候シート+耐候セラーフー+耐
候セラーフー+耐候セラーフー, 10 層以上組み, しまりやさ
り

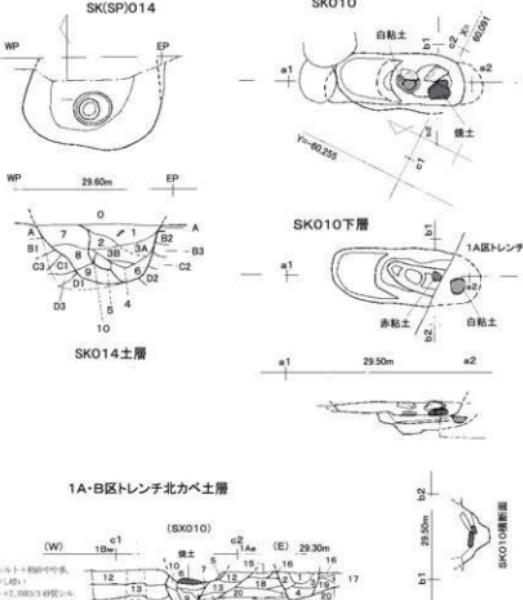
Fig. 15 第1面土坑実測図 ($S = 1/40$)、1A・B区トレンチ土層図 ($S = 1/40$)

Fig. 14 SX099 石列・SX100 河川跡土層注記

(Fig. 14 右下) SX099-100 南侧土层

28. 3. 5980-21-423 (赤褐色) 錫酸シルト+硝酸ナトリウムの水溶液

30. T. RIKI/21-4/21 (赤褐色) 砂質シルト・粗粒砂少し、しまりややあり
 31. T. RIKI/3 砂質シルト・粗粒砂少し、しまりややあり
 32. T. RIKI/2 (赤褐色) 砂質 (赤色鉄鉱) シルト・粗粒含む、しまりややはく、下部に炭酸鉄鉱を含む



1A・B区トレシチ北カベ土層

(Fig. 15) SK014 土層注記

0. トモー1008(2種類)シルト+1005(1種類)シルト混入・鉄物・骨・骨灰・土器
1. 1008(1種類)・1005(1種類)鉄質シルト+鉄物・小礫・しまりあり
2. 1008(1種類)・1005(1種類)シルト+鉄物・通気孔少・しまりあり・注水あり
3. 1008(2種類)シルト+1005(2種類)シルト+鉄物・小礫少・注水あり・しまりややあり
4. 1008(1種類)シルト+鉄物・しまりあり
5. 1008(1種類)シルト+鉄物・1005(1種類)シルト+鉄物・小礫少・注水あり・しまりややあり
6. 1008(1種類)シルト+1005(1種類)シルト+鉄物・1005(1種類)・O.A.より多い・鉄物・小礫・土器・鉄物・骨・骨灰・しまりややあり
7. 1008(1種類)シルト+鉄物・小礫・小石・土器・土器・中古・しまりあり
8. 1008(3種類)シルト+1005(2種類)鉄質シルト+鉄物・小礫少・鉄物少・骨灰・土器・中古・しまりあり
9. 1008(1種類)シルト+鉄物・小礫少・土器・中古・しまりややあり・注水あり・土器・中古・しまりあり
10. 1008(3種類)シルト+鉄物+1005(4種類)シルト・少・しまりややあり
- D1. 包含物なし
- A. 1008(1種類)シルト+鉄物・中古・骨灰・土器・中古・鉄物・骨灰・しまりややあり
- B1. 鉄物(?)・1008(2種類)シルト+鉄物・中古・鉄物・骨灰・土器・中古・しまりややあり
- B2. 鉄物(?)・1008(2種類)シルト+鉄物・中古・鉄物・骨灰・土器・中古・しまりややあり
- B3. 鉄物混入・1008(2種類)シルト+鉄物・中古・鉄物・骨灰・土器・中古・しまりややあり
- C1. 10~1500(2種類)シルト+1005(4種類)シルト+鉄物・土器・中古・しまりややあり
- C2. 1008(5種類)シルト+1005(4種類)シルト+鉄物・小礫少・土器・中古・しまりややあり
- C3. 1008(2種類)シルト+1005(4種類)シルト+鉄物・小礫C1・C2層より多く・土器・中古・骨灰・中古・鉄物・骨灰
- D1. 1008(1種類)シルト+鉄物
- D2. D1層+鐵質色シルト+小礫・土器・中古・鉄物・骨灰・鉄物・骨灰

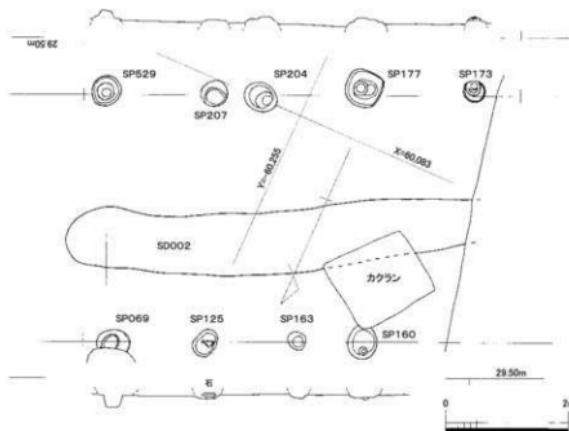


Fig. 16 第1面検出据立柱建物実測図(1) (SB001, S=1/80)

これは下部の弥生土器包含層であったので、溝下層と下部包含層出土遺物が混在した。方位はN=23° -Wで、SD002とほぼ直交し、SD002東端との間は**方形区画**隅角の階層状(出入口状)となる。出土遺物(Fig. 26-1~9)から中世前期。SD002(Fig. 11, PL. 1-2, PL. 6-1~4)はSD001と直交する。**方形区画**の南辺。7.8m以上で西に続き、東側は立ち上がる。幅1.0~1.2m、深さ35~70cm。西側が深く、断面は逆台形から西側がV字形。東側1区は古い溝、埋没後にII区以西を再掘削。II区東半に大小礫を集中廃棄。**出土遺物**(Fig. 26-10~23)から中世前期。

SX013(Fig. 12左上, PL. 7-1, 2)は上記方形区画内検出の石敷状遺構。扁平な一辺40cmまでの大繩を110×125cmの土坑掘方の片側に寄せてに敷く。当初、建物遺構の基礎(礎石)と考えたが、対応する遺構が無いため性格不明遺構とする。出土遺物(Fig. 32-5, 6)には須恵器があるが、下部遺構からの混入と考えられ、実際は区画溝の時期(中世)と考える。**SX013とその周囲の下部**には、飛鳥時代末期の遺物—括廃棄遺構などがあった(Fig. 12右上, PL. 2-3, PL. 7-1)。**SX128**(出土遺物 Fig. 32-16, 25, 28-5, 14-16)、**SX127**(出土遺物 Fig. 28-14~16)、**SX247**(出土遺物 Fig. 32-29)、**SX047**(出土遺物 Fig. 27-28)などである。このうち、**SX127・128**(一部SX247)は土器破片の接合が多く、整地層の整地最終段階の遺物廃棄単位で**一連の廃棄の可能性**がある。

SK058および**SK052**(Fig. 12左下, PL. 6-3)はA4区で検出。058が052に切られ、いずれも南側が調査区外。**058**は1.3m×1.2m以上の略円形、深さ24cm。出土遺物(Fig. 26-42)は須恵器高杯があり飛鳥中期。**052**は1.6m以上×0.7mの楕円形、深さ40cm。出土遺物(Fig. 27-3~5, 32-22, 23, 30)は主に飛鳥後~末期(VI期)で、上層に**蹄脚鏡**。仮グリッド4A区西半では検出面が飛鳥末期整地層よりやや下がっている。**SK080**(Fig. 13, PL. 2-4, PL. 6-7, 8)はA4区東検出の**石組遺構**。**SK052・058**よりも検出レベルが高くなる。1.5m×1.0m以上の隅丸形状土坑の下部に、10~20cmの繩を西側・北側に上るように敷き、かつL字形状に敷き、その中央に70×80cm、高さ55cmの大型礫(岩)を据える。「磐座」のようである。この石組を除去した下部は3つの小土坑が重複

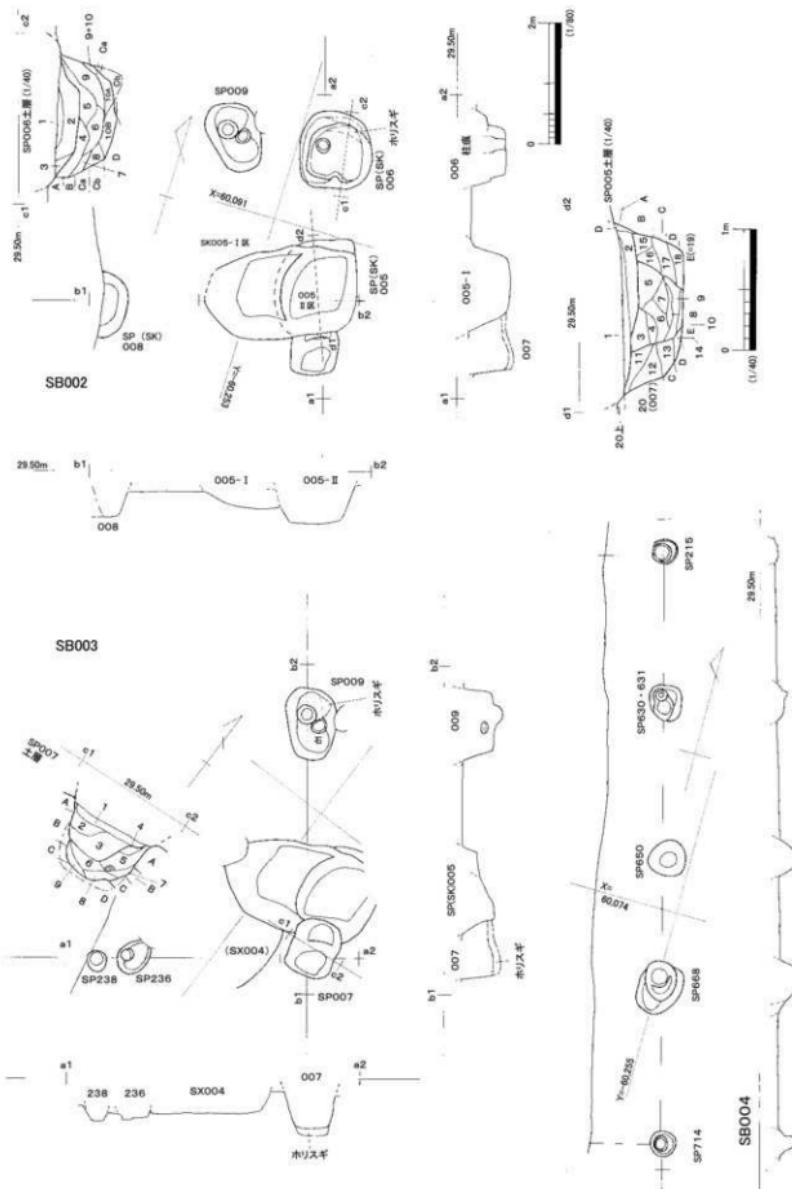


Fig. 17 第1面検出掘立柱建物 (2) ($S = 1/80$, 土層図 $S = 1/40$)

(Fig. 17 SP006・SP005, SP007 土層注記)

SP(SK006) 土層注記 (SB002 柱穴)

SP (SK) 005 土層注記 (SB002 桂穴)

- ④ T.5-10W80/4シルト+細砂・小砾、しまりあり、1層+A層
 ⑤ T.5-10W84/3(セメント充填材) 細質シルト+細砂・小砾多、しまりあり
 (6) 3.5

していた。①石組みを露出させる際、②石組みの間、③石組み下部からそれぞれ遺物が出土し (Fig. 28-9~11, 33-17, 18)、④は白磁など新しい遺物もあるが、②に飛鳥時代の須恵器大甕があり、その時期の構築だろう。東側の石列 SX099 の構築と関係する祭祀遺構と考える。

SX099 および **SX100** (Fig. 14, PL. 6-10~15) は 4 B 区 (調査区東端) 検出の石列遺構と河川跡。

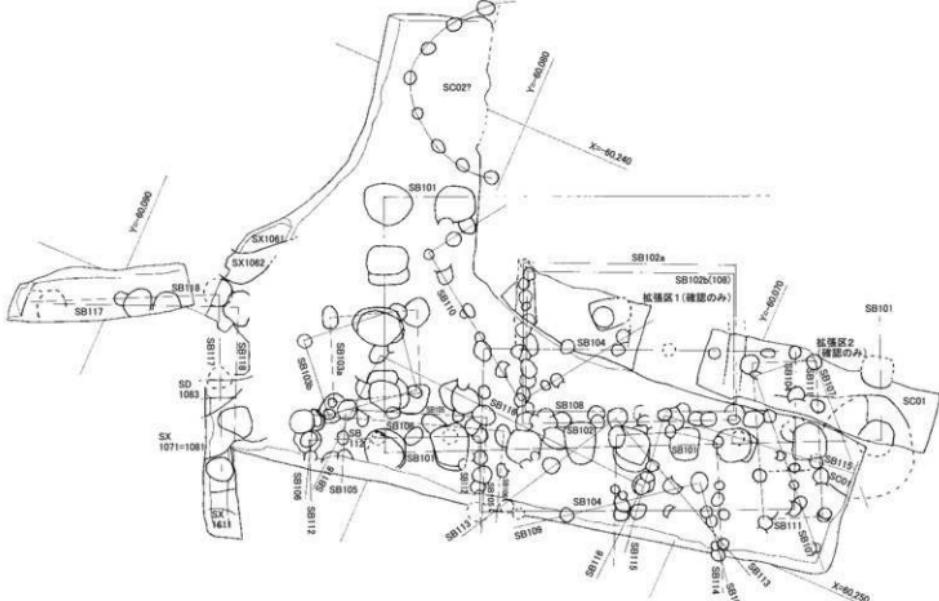


Fig. 18 第2面掘立柱建物ほか主要遺構分布図 (S=1/160)

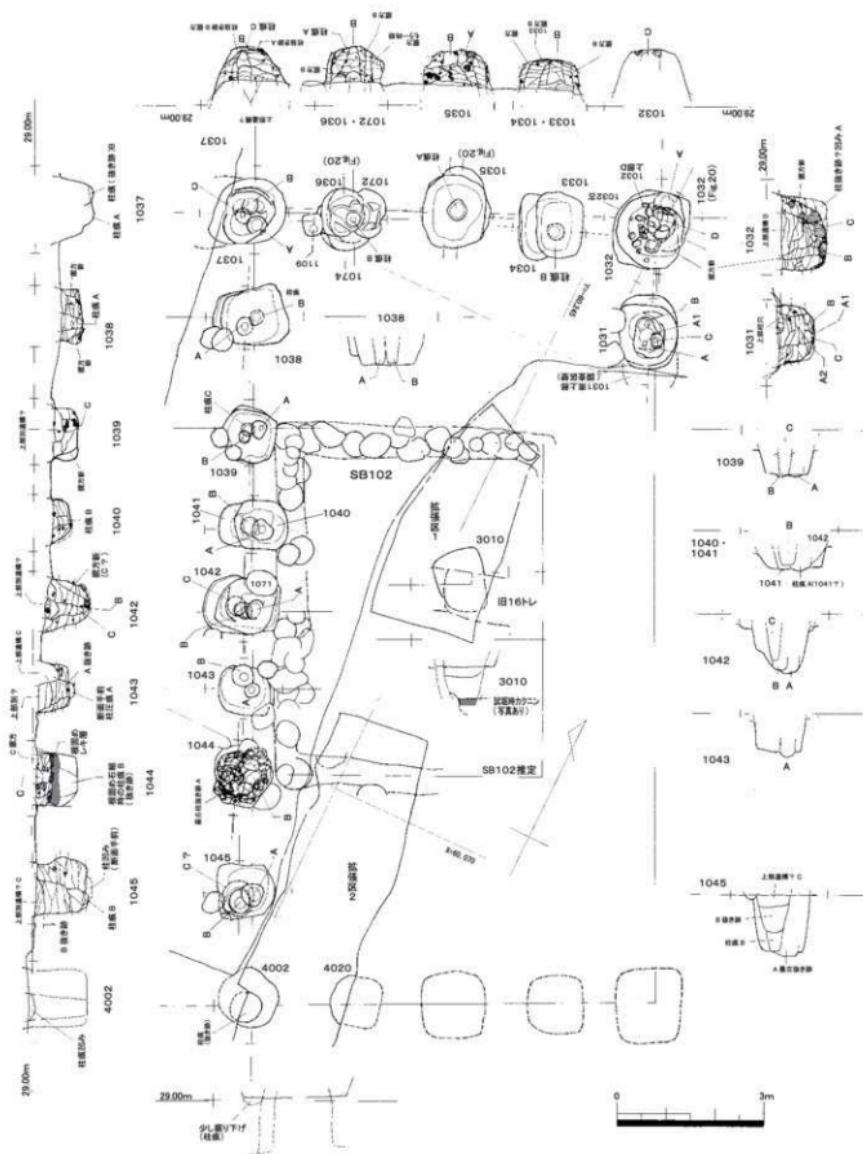


Fig. 19 SB101 実測図 (1) (S=1/100)

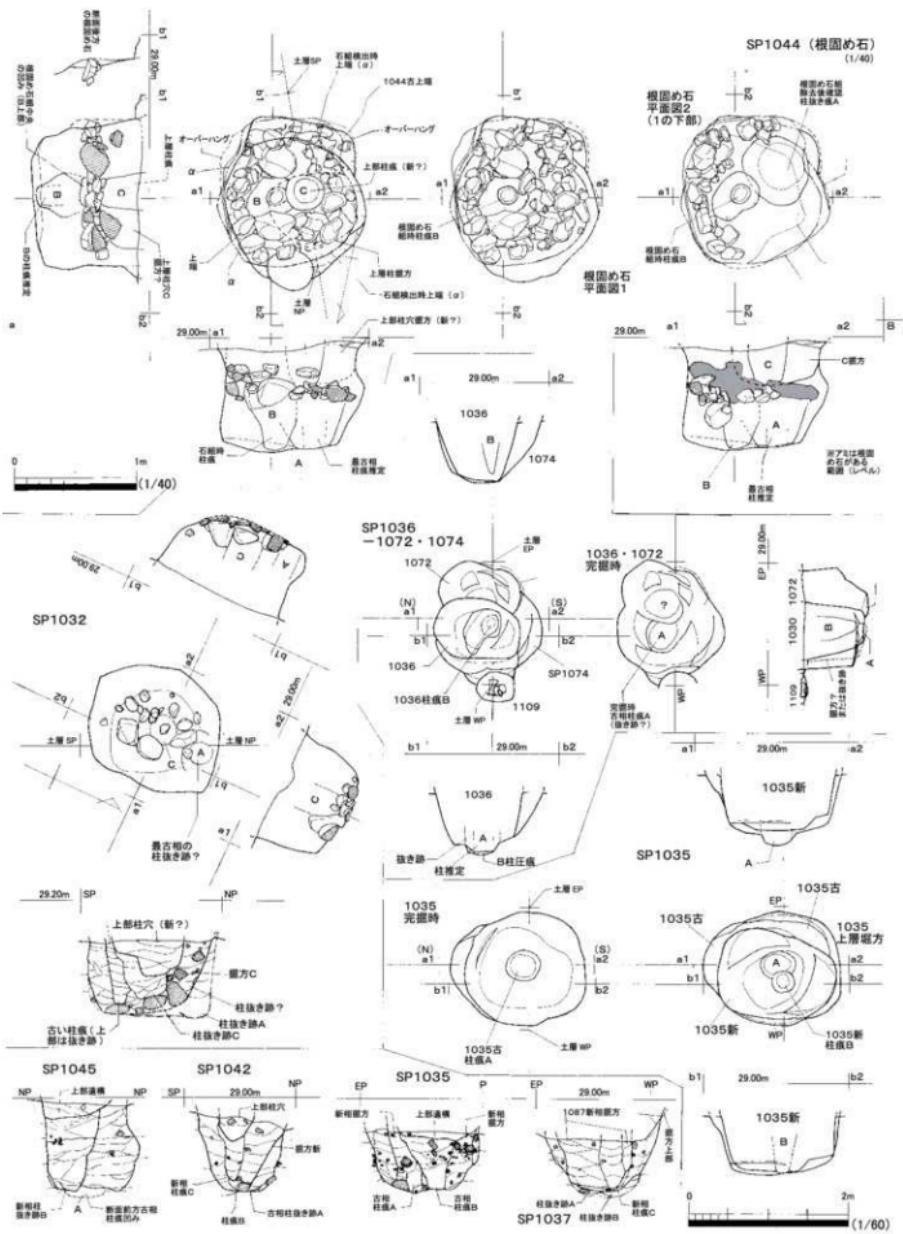


Fig. 20 SB101.2 柱穴平面図・断面図・土層図 (S = 1/60), SP1044根固め石組実測図 (S = 1/40)

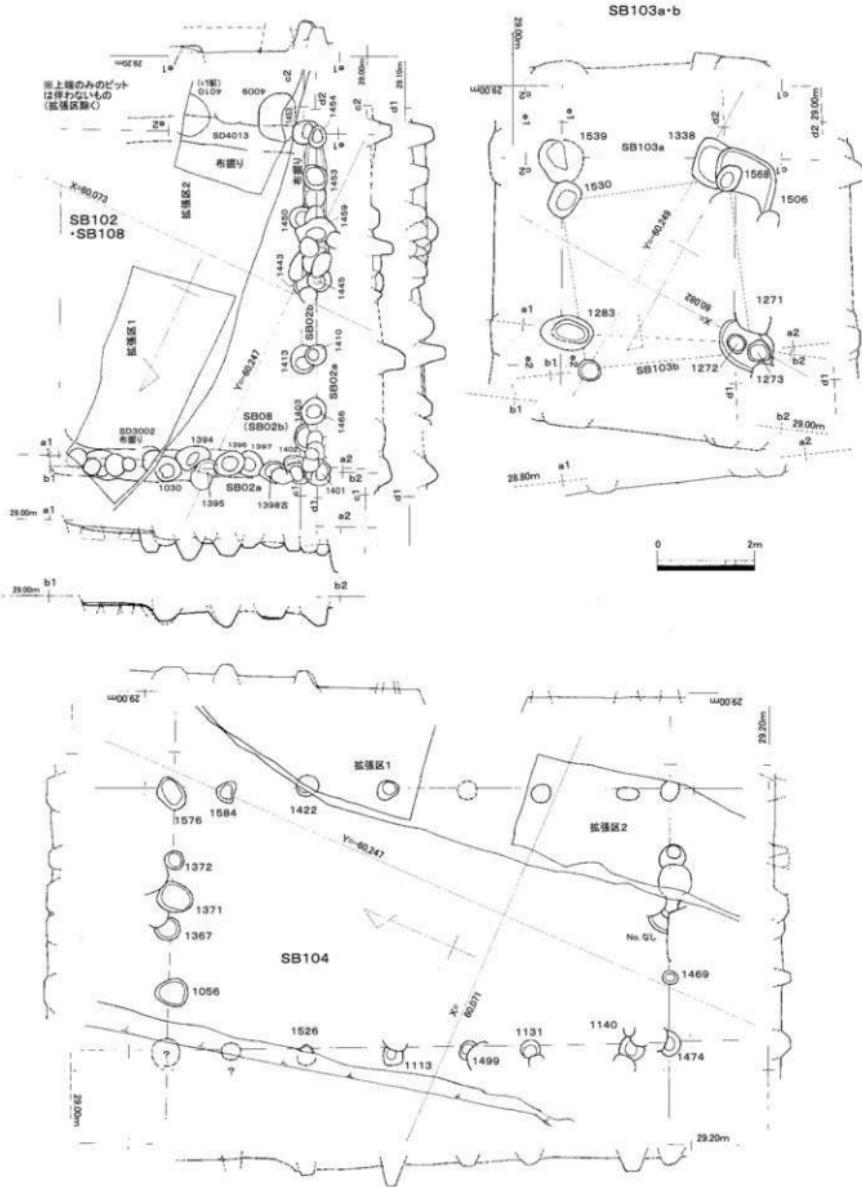


Fig. 21 SB102・103・104 (第2面検出掘立柱建物実測図1) (S=1/100)

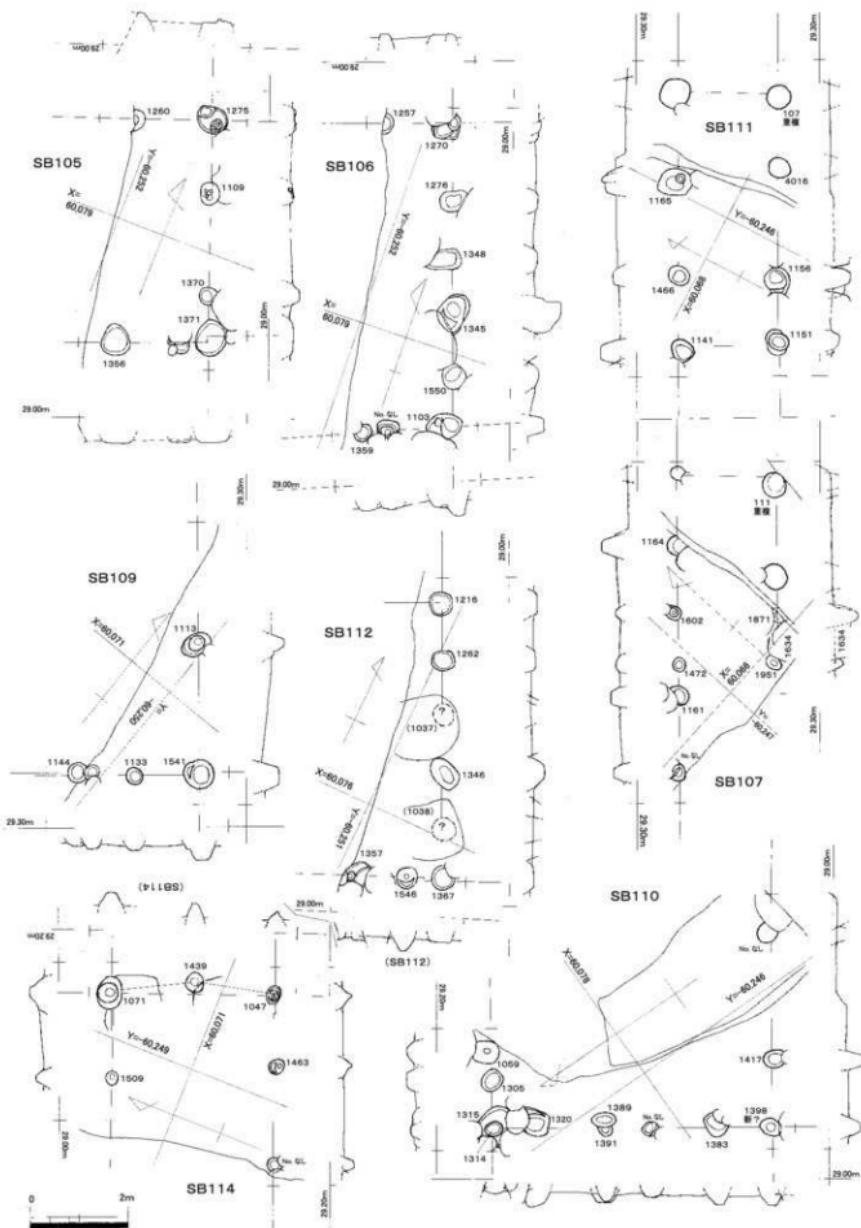


Fig. 22 第2面検出掘立柱建物実測図2 (S = 1/100)

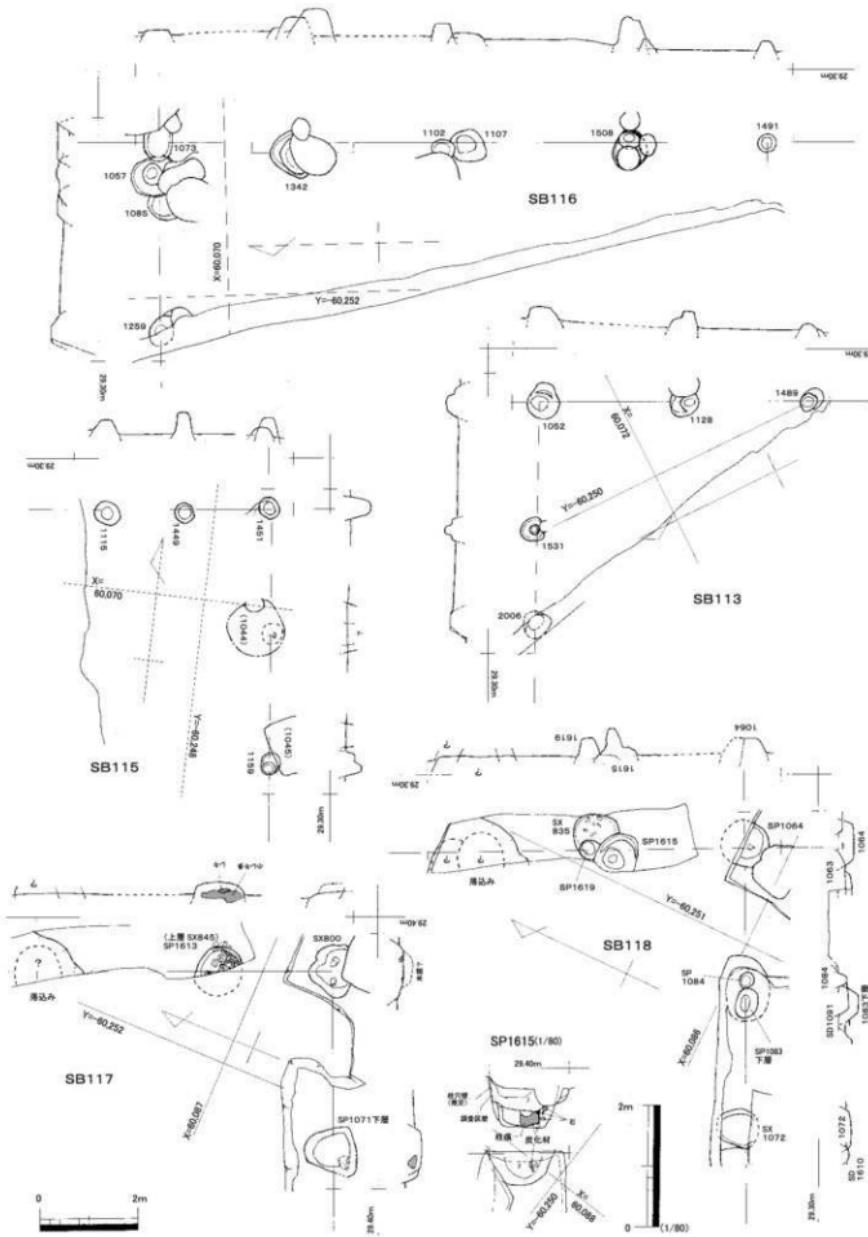


Fig. 23 第2面（第1面下）検出掘立柱建物実測図3 (S = 1/100)。柱穴 SP1615平面図・土層図 (S = 1/80)

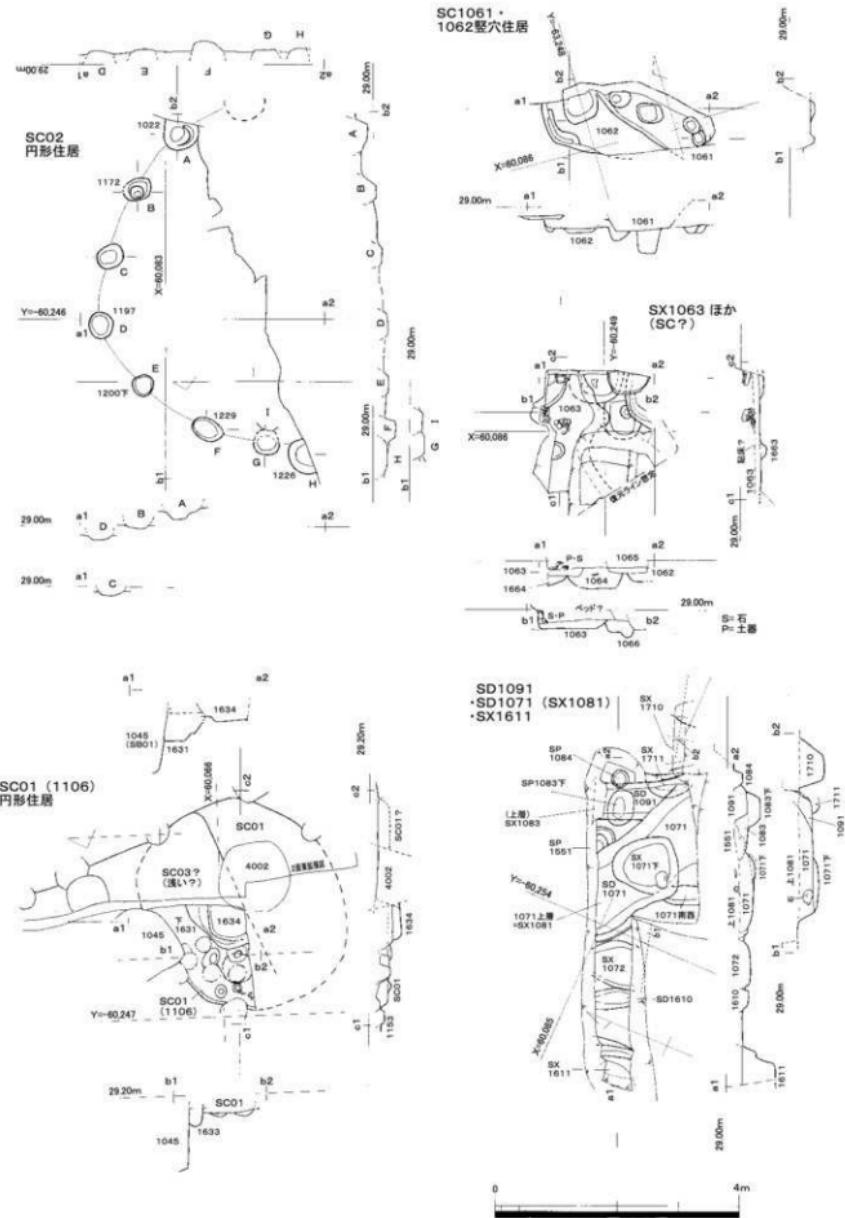


Fig. 24 第2面検出竪穴住居、土坑・溝状道構実測図 (S = 1/80)



4 A区南壁第1雨下 SK(SX) 840・SK(SX) 841 ほか土層

Fig. 25. 4A区北緯SY840・841実測図・土壤断面図 (S=1/40)

石列は確認長 4.3m でさらに南北に延び、石列の幅は 40~85 cm。使用される礫は 50×70 cm 高さ 50 cm 大から 20×15 cm 大までの角礫で、大きな礫は一段、高さ 30 cm までの礫は二段積み上げて石列を形成する。石列は土層を検討すると砂質シルトによる **堤状盛土** の中にある。この堤の東側裾は、旧河道の SX100 上部の壁になっている (Fig. 14 f1~f2)。SX100 は完掘していないが、この延長と思われる旧河道の河川堆積を周囲の造成工事中の広い範囲の掘削で確認している。この河道自体周囲地形等高線との関係から不自然で (Fig. 3)、どこかに井堰を設けて南北どちらにも水を流せる **人工水路の可能性** もある (Fig. 2)。SX099 石列の下部には浅い溝があり、これが石列の構築時の下部構造なのか、旧河道に平行する支線水路なのかは、この範囲の調査では不明。SX099 からは石列を露出させる過程で遺物が出土したが (Fig. 32~24~27)、「堤」内の遺物であろう。**7世紀末（VI期）**で、**石列構築上限**となる。SX100 旧河道はほとんど遺物がないが、石列（堤）を構築する時には存在したこと

SX378 (Fig. 15 左上、PL. 7-4) は 110×70 cm の浅い不整形土坑。礫が多く埋められ、その上に土器片がある。出土遺物 (Fig. 27-33, 34) で奈良時代の土師器甕。これに切られる **SX379** は奈良時代初頭の須恵器がある (Fig. 27-35)。SK377 (Fig. 7、PL. 7-3) は径 120cm 前後の不整円形土坑（南側は調査区外）。飛鳥時代末整地層を切るが (Fig. 8-7~10, 12 層が土坑、同 11, 14, 18 層が整地層)、出土遺物 Fig. 33-9, 10 もほぼ同じ時期 (Fig. 27-12 は下部層か)。整地層の時期は飛鳥時代末 (VII 期前) であろう。

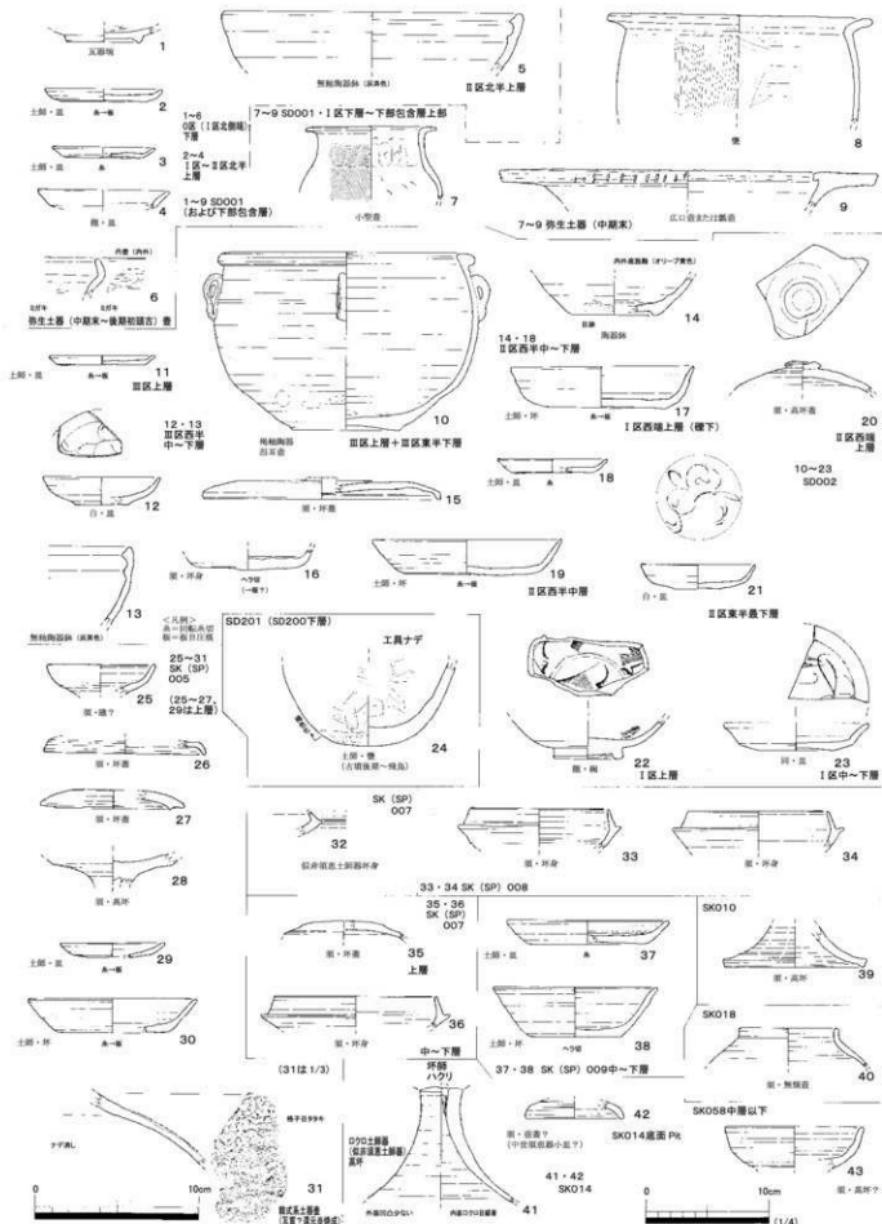


Fig. 26 出土遺物実測図 (1) (第1面溝状遺構・土坑・大型柱穴) (S=1/4, 一部1/3)

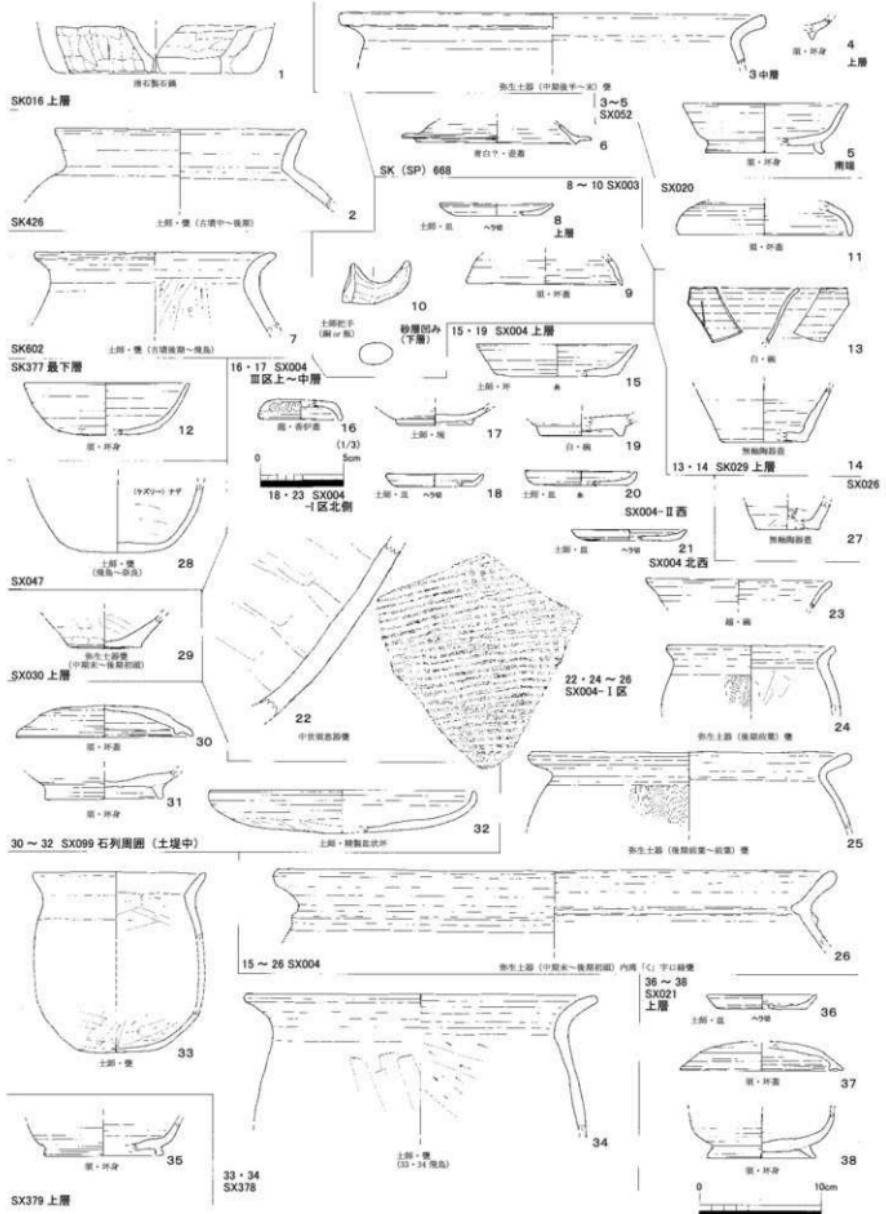


Fig. 27 出土遺物実測図 (2) (第1面土坑・その他の遺構) (S = 1/4, 一部1/3)

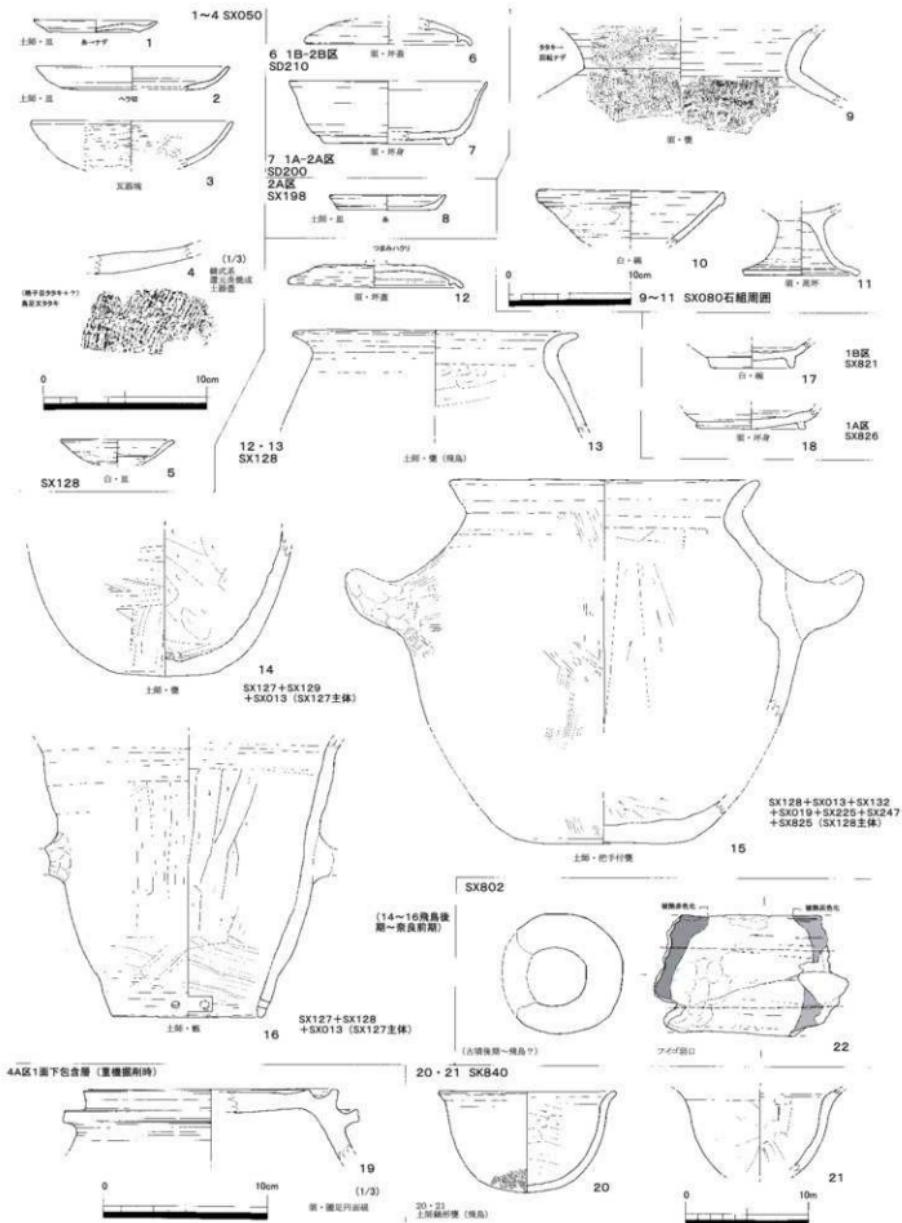


Fig. 28 出土遺物実測図(3) (第1面溝状遺構・土坑・その他の遺構、1面下包含層) (S=1/4, 一部1/3)

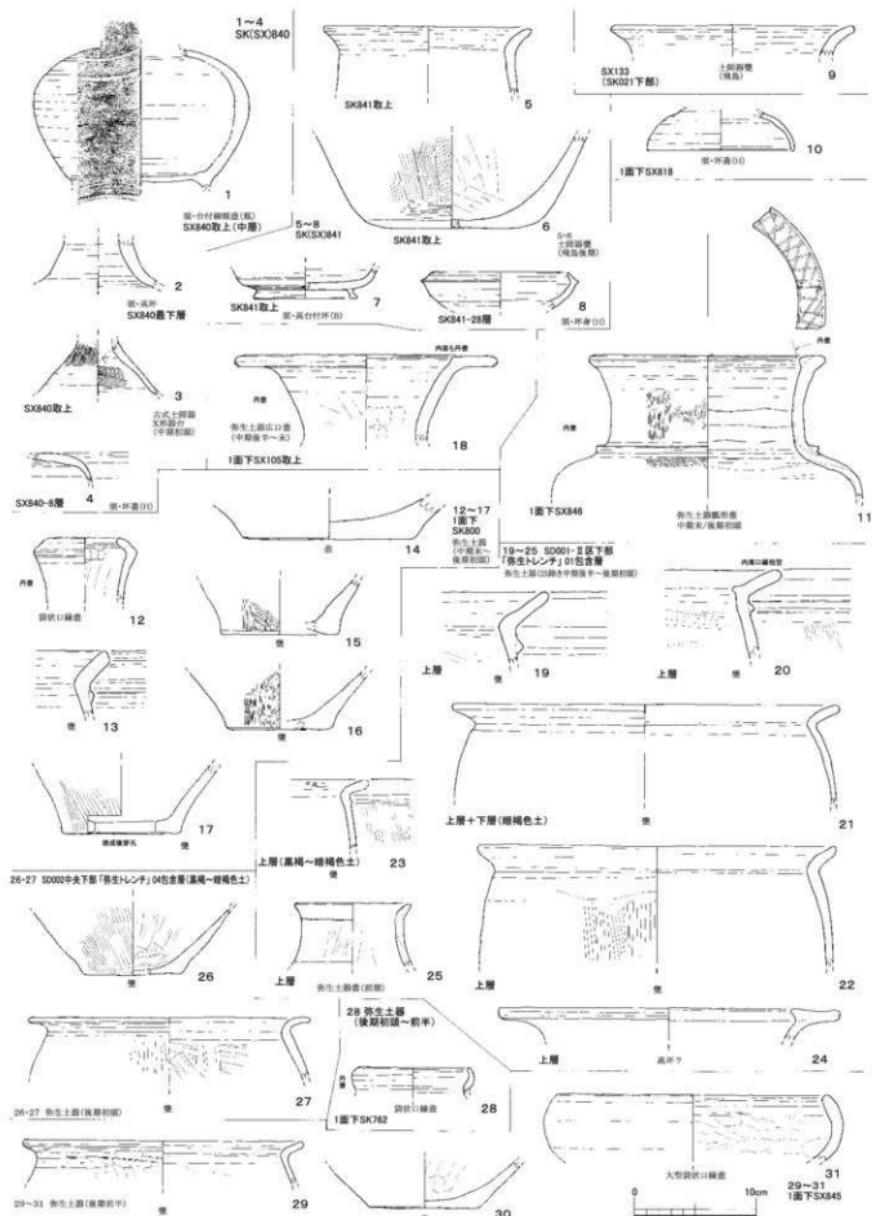


Fig. 29 出土遺物実測図 (4) (第1面土坑、第1面下部土坑・その他造構、第1面下包含層) (S = 1/4)

SK014 (Fig. 15 上中、PL. 7-9) は調査区北端検出の 115cm×75 cm 以上の隅丸方形土坑。深さ 50cm。底面にピットがあり柱痕の可能性。**SP005・006・007・008** のような**方形土坑状大型柱穴**か。出土遺物には飛鳥時代の土器があるが (Fig. 26-41, 42)、層位的および周囲の状況から中世前期の方形区画溝に伴う掘立柱建物の柱穴だろ。SK010 (Fig. 15 右上、PL. 6-9、PL. 7-5) は調査区北側検出の溝状土坑。南端の上面検出を当初誤っているが、125 cm 長×幅 35~48 cm、深さは北側 10 cm、中央~南側 24~30 cm。長軸方位は N-24° -W。焼土と粘土塊が出土。出土遺物 (Fig. 26-39) には須恵器があるが、実際は中世前期の遺構と考える。**SP057** と **SX028** (Fig. 15 左下、PL. 7-8) は調査区北東端検出のピット状土坑。いずれも上層に粘土ブロックを廃棄。遺物は少ないが、おそらく中世前期遺構。

第1面では多くのピットを検出し、すでに述べたように多くは柱穴でよいと考えるが (13 頁)、掘立柱建物としてまとめられるものが少なかった。以下、確実なものを報告する。**SB001** (Fig. 16) は SD002 をまたぐように位置する建物。梁間は 4m と広い 1 棟 (2 棟の可能性もある) × 行け 3 棟以上 (6 m 以上)、方位は N-65° -E。側柱列には東柱もある。各柱穴は小さい。溝との前後関係は不明だが (梁間にもう 1 柱穴あるとすれば溝が切るか)、中世前期か。**SB002** (Fig. 17 上) は調査区北西検出の 1 棟以上 × 1 棟以上、3.8m 以上 × 2.6m 以上の建物。北・西側に延びる。N-18° -W 柱穴は何れも**土坑状大型柱穴**。**SP006** (PL. 7-5) は 60×65cm、深さ 50cm の隅丸方形土坑状。下部西側に柱压痕。**SP (SK) 005** (PL. 7-7) は東西 2.6m × 南北 1.54m の土坑状だが、西半は別の土坑らしい。建物柱穴は東半の 1.36×1.54m の丸みがある長方形土坑状部分で深さ 60 cm。柱抜き跡が土層にある。SB003 の

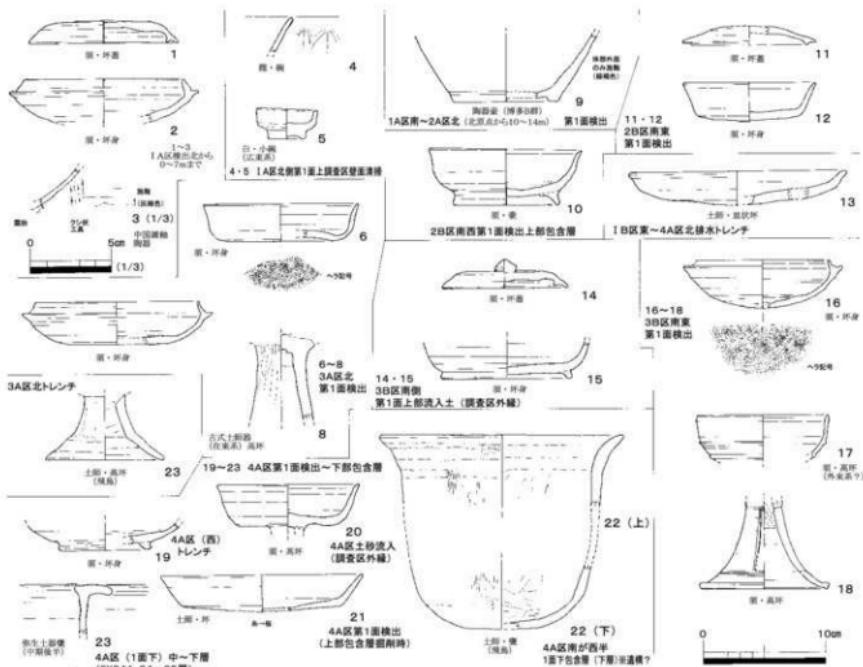


Fig. 30 出土遺物実測図 (5) (第1面板グリッド検出時・上部包含層ほか) (1/4, 一部1/3)

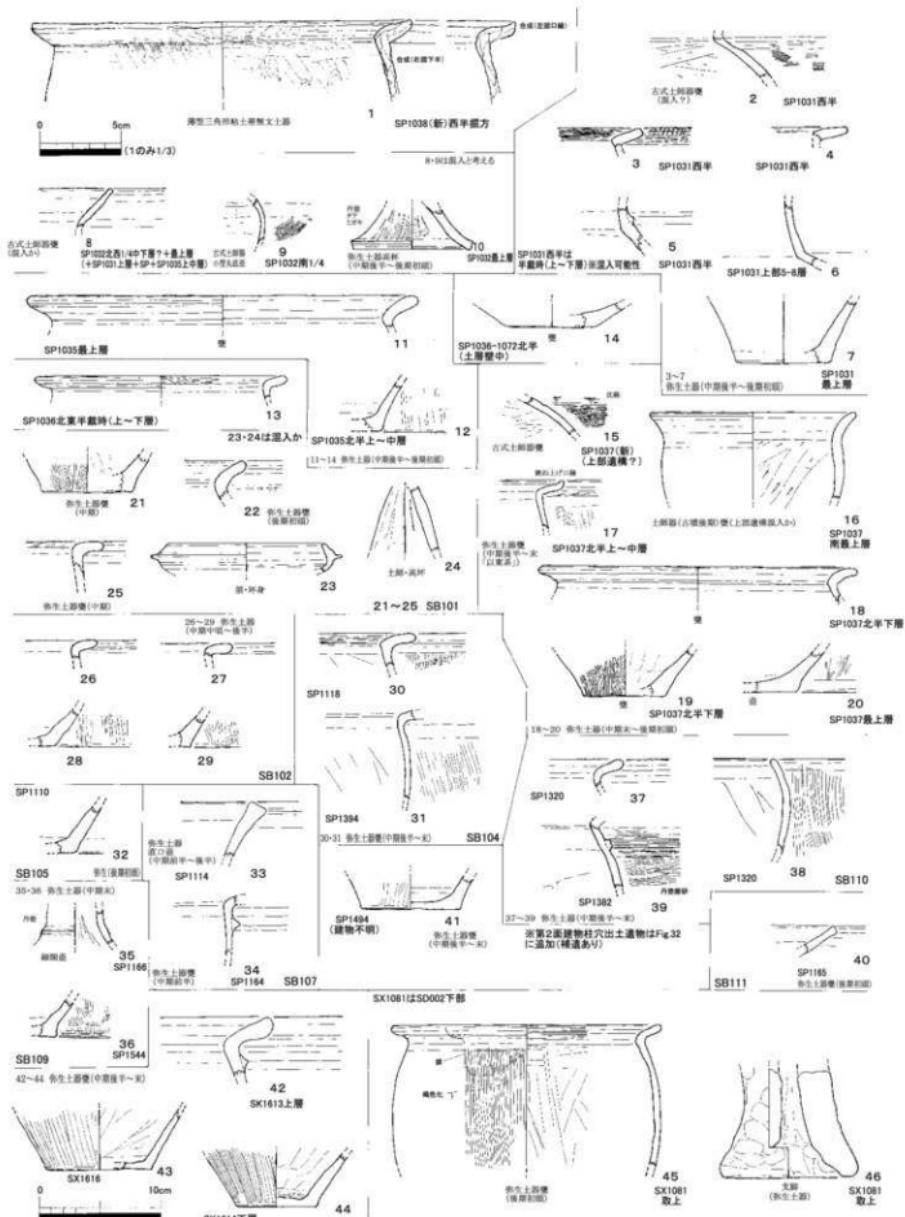


Fig. 31 出土遺物実測図(6) (第2面掘立柱建物柱穴、土坑、竪穴ほか) (S=1/4, -部1/3)

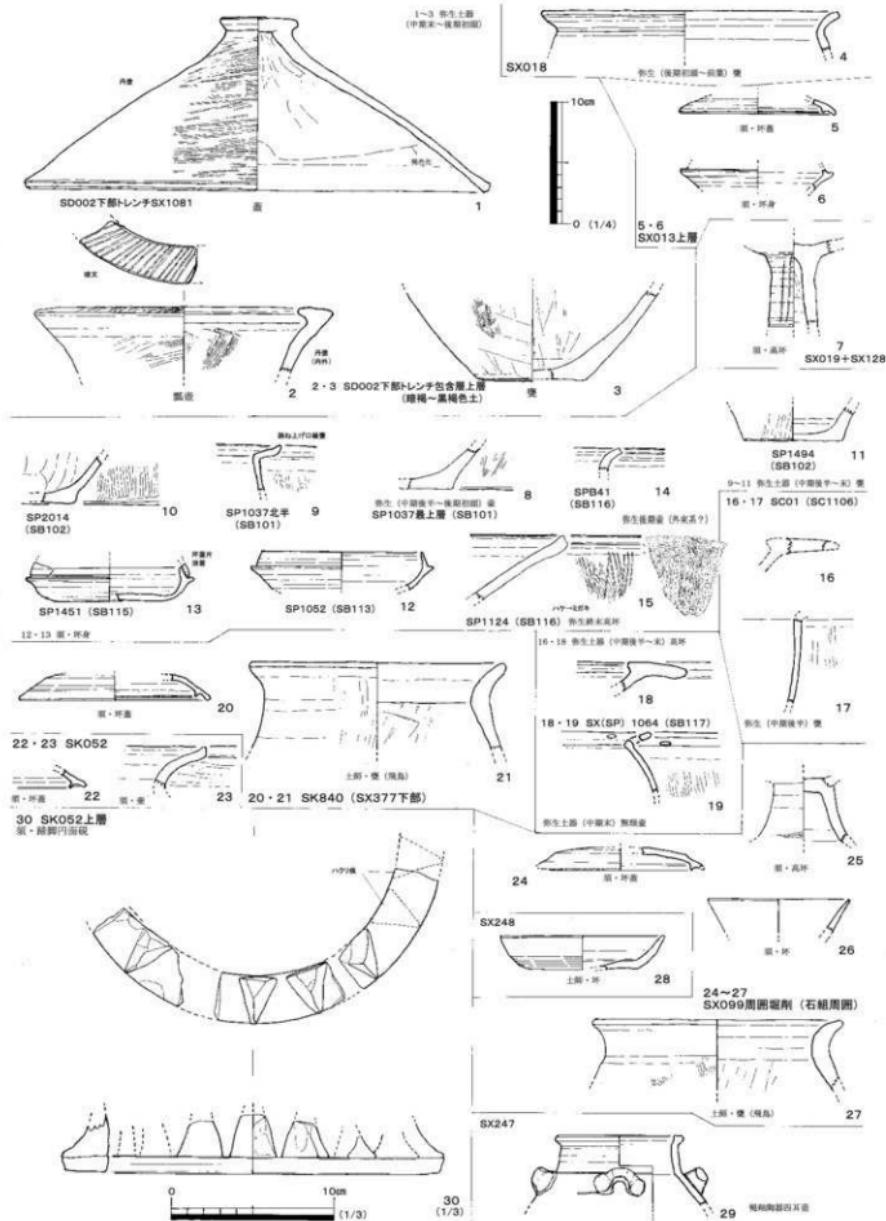


Fig. 32 出土遺物実測図 (7) (第2面・第1面下部遺構、第1面遺構補遺) (S = 1/4, 一部1/3)

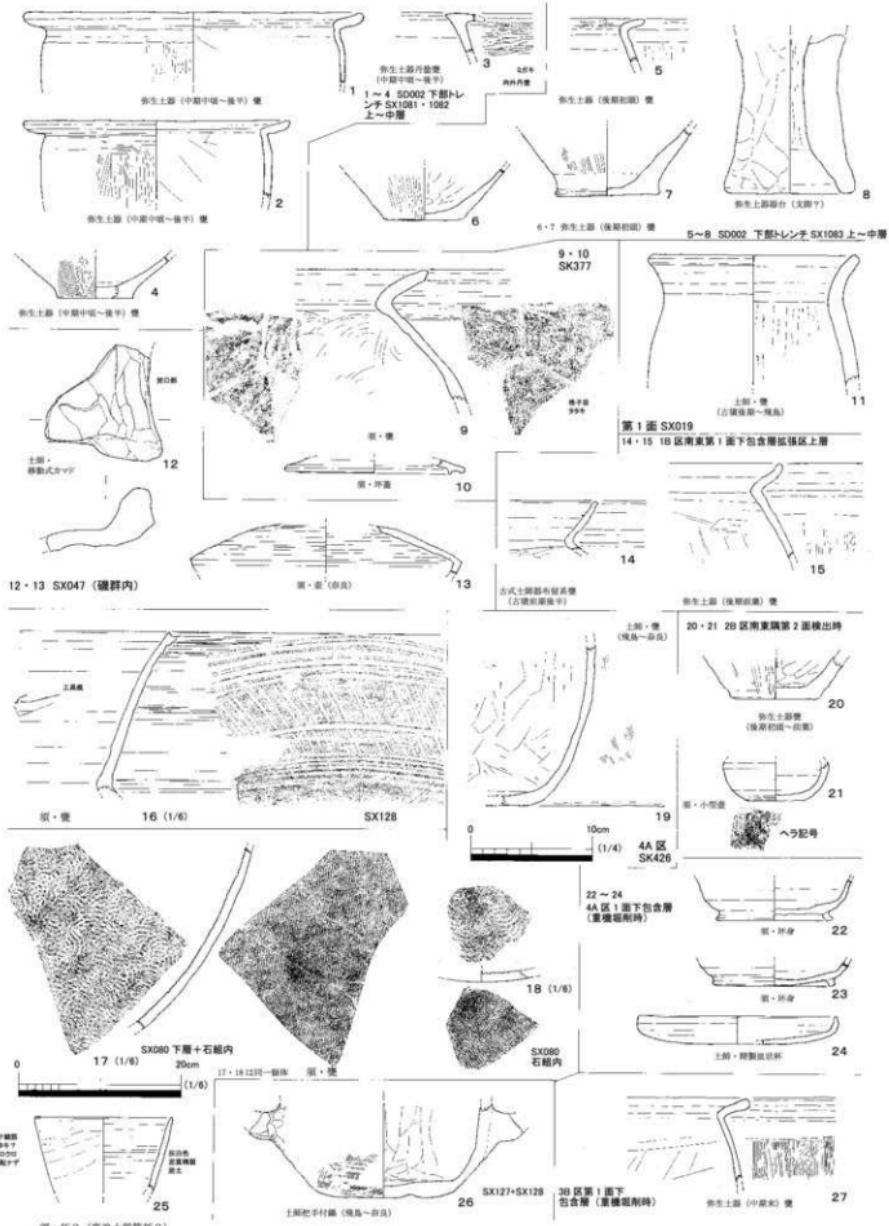


Fig. 33 出土遺物実測図 (8) (第1面下部遺構、第1面造構補遺、第1面下包含層、第2面検出時 ($S = 1/4$ 、一部 $1/6$)

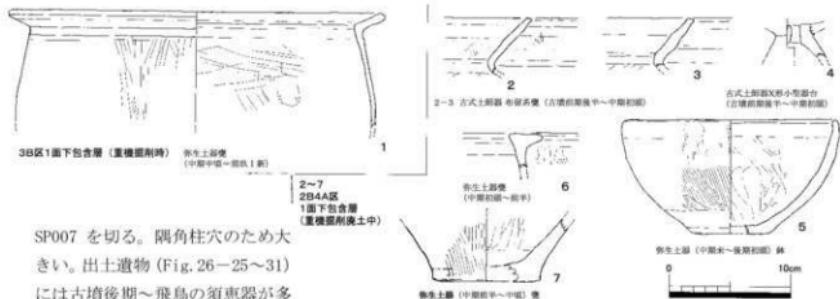


Fig. 34 出土遺物実測図 (9) 第1面下包含層 (S=1/4)

SB区1面下包含層（重複標示時） 弥生土器層
(中葉中期～後期Ⅰ期)

2~7
2B4A区
1面下包含層
(重複標示後土中)

SP007 を切る。隅角柱穴のため大きい。出土遺物 (Fig. 26~25~31)

には古墳後期～飛鳥の須恵器が多いが、**中世前期**の土師器壺・皿があ

り (同図 29, 30)、これが建物の時期。SP008 是径 1.1

m、深さ 40 cm の柱穴。出土遺物に MT15 の須恵器壺身

2 点 (Fig. 26~33, 34) があるが直接伴う時期ではない。

SB003 (Fig. 17 下) は SB002 に重複して検出され、SB002

より古い。西側は**土器罐 SX004**を切る。SB002 よりは

各柱穴はやや小さいが、SP009 と SP (SK) 007 (PL. 7

~6) はやや大きく土坑状。SP009 の出土遺物 (Fig. 26

~37, 38) に**中世前期**の土師器壺・皿あり。SK007 の出

土遺物 (Fig. 26~32, 35, 36) は古墳後期～飛鳥の須恵



Fig. 29-11 (弥生土器丹塗瓢形壺)



Fig. 32-23 (須恵器輪脚碗)



Fig. 26-31 (格子目
タタキ瓦質土器)



Fig. 28-19 (須恵器圓足碗)



Fig. 28-4 (左: 外面/右: 内面, 鳥足文タタキ? 還元炎燒成土器)

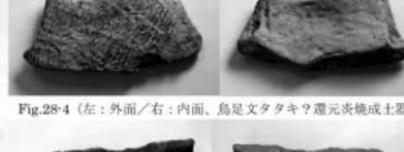


Fig. 26-10 (褐釉陶器四耳壺)



Fig. 36-44 (縄文晚期深鉢)



Fig. 31-1 (左: 外面/右: 内面, 三角形粘土帯無土器)



Fig. 32-1 (弥生土器丹塗蓋)



Fig. 36-43 (左: 外面/右: 口縁部内面, 縄文後期浅鉢)



Fig. 38 (縄文早期山形鉢)

Ph. クエゾノ 4 次出土遺物写真

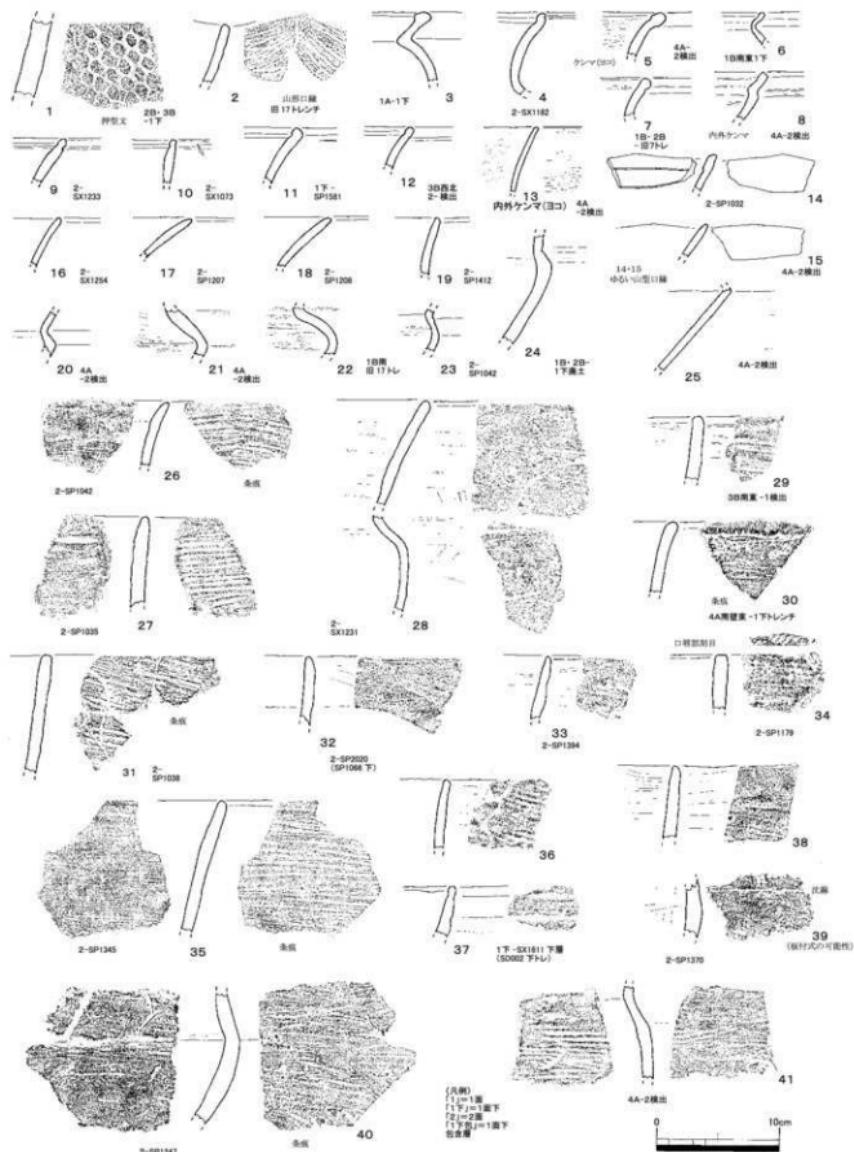


Fig. 35 繩文土器実測図 (1) ($S = 1/3$)

器が主体だが遺構の時期を示さない。SB004 (Fig. 17 右) は 2A 区～3A 区西側検出の 4 間、9.8m の柱列で西側に展開か。方位は N-15° -W。各柱穴は小さい。遺物は少ないが、中世前期だろう。

(2) 第 2 面 (Fig. 7) ※第 1 面下部を含む

18 棟の掘立柱建物を復元した (Fig. 18)。他に堅穴建物や土坑などがある。弥生時代中期～後期が多いが、一部は古墳時代～飛鳥時代前半。柱穴は重複関係が不明確なものがあり、建物時期は全ての建物柱穴出土遺物を細片まで全てチェックした上で総合的判断。SB101 (Fig. 19・20、Pl. 3-1, 2, Pl. 10-1, 2 柱穴 Pl. 10-8~17) は 4 × 8 間、柱間隙 8.25 × 16.5m、柱間内床面積約 136 m² の超大型建物。N-25° -W。東側に上面確認「拡張区」を設定し、建物南隅角 (SP4002) と中央屋内棟持柱 (試掘調査厚真にある) の存在を確認した。各柱穴は一辺 100～160cm の隅丸方形、深さは 50～130 cm と差異がある。本来の深さはさらに 80cm 前後あり (Fig. 8 の SP1037 上部)、柱穴上面規模は大きく、上面では両隣の柱穴と重複するだろう。側柱は柱間も深さも一定しないが、梁間の柱間や深さは一定的。平面精査と、土層検討から多くの柱穴で柱痕や柱抜き跡が 2-3 確認でき、掘方の重複確認が出来た柱穴もある。SP1032・1035・1036 (=1072) が典型的 (Fig. 20)。ほぼ同じ箇所での 2 回の建替。調査状況から上面確認や掘削が粗い部分があり、重複柱穴を確認できず掘った部分があり (一部は途中で気づいた)、周囲柱穴との切合が怪しい箇所もある。若干の須恵器・土師器片が出土したものそのためだろう。SP1044 は建替え時の柱裏込石組 (根固め礎) がある (Fig. 20 上、Pl. 10-15～17)。弥生時代では異例だが、他にも若干の根固め礎がある柱穴もある (SP1031・1032)。SB101 は規模と構造から「久保園タイプ」の北部九州の弥生時代超大型建物形式 (久住猛雄 2003 「北部九州における弥生時代の特定環状区画と大型建物の展開」『日本考古学会 2003 年度説明会資料集』)。飛鳥時代に類似する官衙連建物例があるが、それらは中央棟持柱がなく、梁間は 3 間までであり異なる。SP1036 を切る SP1109 にはほぼ完形の弥生土器支脚があり建物時期は間違いない。出土遺物 (Fig. 31-2～7, 8～10, 13, 14, 15, 20, 22, 23, 25, 32-8, 9) の大半は弥生中期～後期初頭。建物の時期を示す。韓半島系の三角形粘土帯無文土器もある (Fig. 31-1)。SB102・108 (Fig. 21 右上、Pl. 10-2～7) は SB101 に切れられ、西辺が SB101 西辺に並ぶ。当初は溝状に検出したが、下げるごとに溝が消え密な柱穴列となった。東側拡張区はやや高いレベルで「溝」を検出し、「布掘溝」がある「布掘建物」。建替があり、SB102a と SB102b (=SB108) とした。古墳中期以降の「大壁建物」に類似するが、同様の布掘溝柱穴列建物は佐賀市村谷永遺跡 (弥生後期) などに存在する。布掘柱穴列のため「間数」は不明。5.0 ～5.2m (北隅角は布掘溝の屈曲から推定) × 7.0m、N-25° -W。床面積 35 m² で「大型建物」に入る。出土遺物 (Fig. 31-26～29, 32-10, 11) は弥生中期土器で、須恵 II 式新相まで。わずかに土師器があるが重複柱穴の混入だろう。SB102 が弥生中期末なら SB102 とプランが重複する SB101 はその直後。SB103 (Fig. 21) は建替がある 1 × 1 間の建物。SB103a (古) は 3.3 × 3.5m、N-29° -W。SB103b (新) は 3.3 × 3.6m、N-39° -W。出土遺物は全て

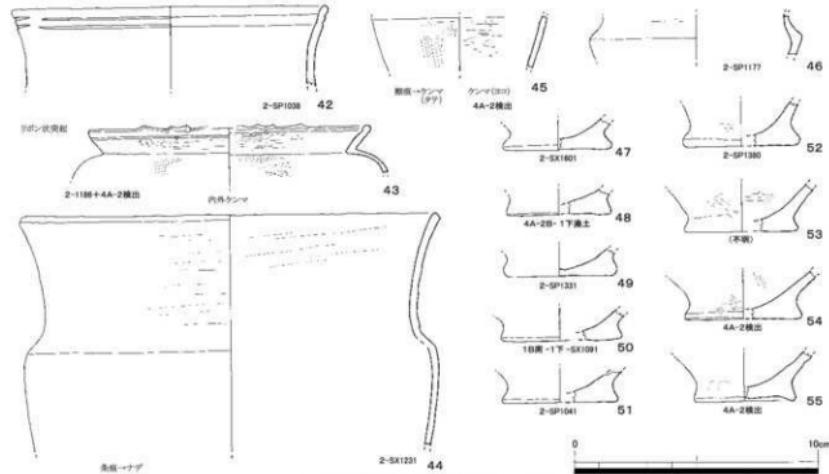


Fig. 36 縄文土器実測図 (2) (S = 1/4)

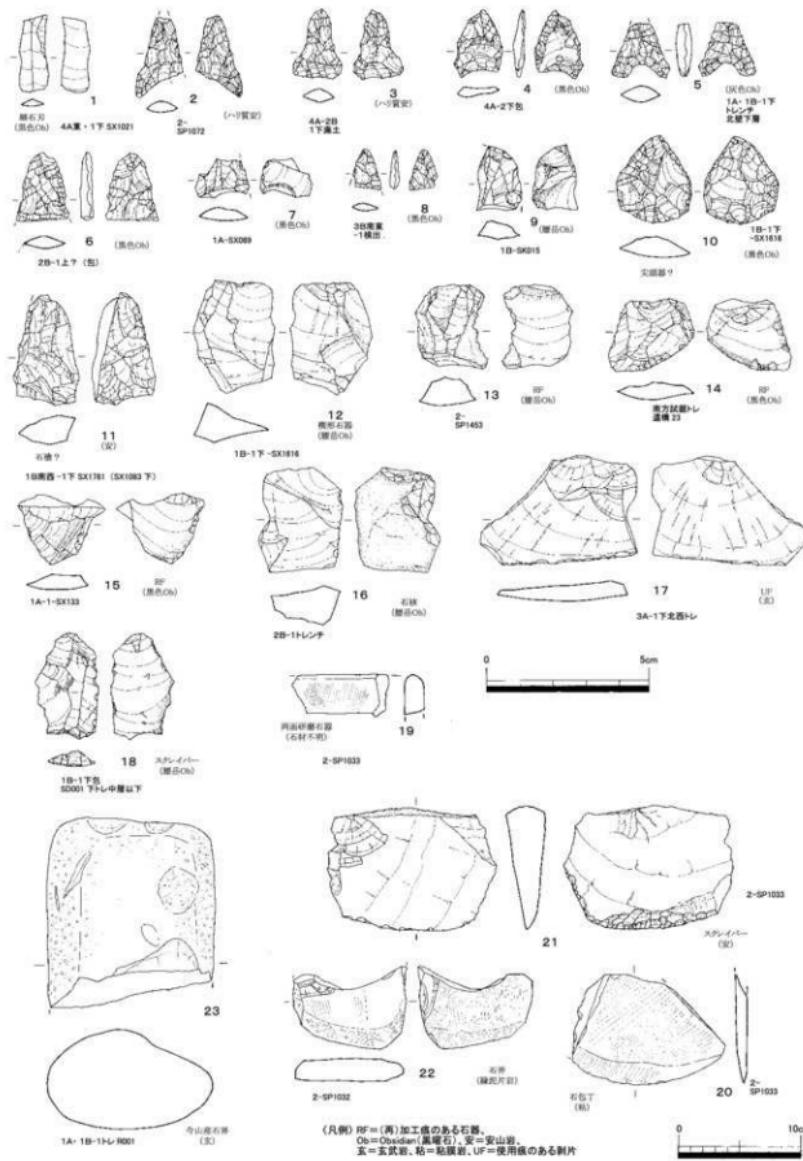


Fig. 37 石器実測図 (旧石器時代～弥生時代前半期) (S=2/3, 1/2)

弥生土器片、中期末まで。SB104 (Fig. 21) は 5×7 間、 $5.0 \sim 5.2$ m \times 10.3m、約 52.5 m² の大型建物。SB101 に切られ、SB102 との先後は微妙。N-24° -W で SB101・102 とほぼ同じ。わずかに古式土師器片の出土があるが混入。大半は弥生中期土器片、中期後半～末の甕片 (Fig. 31-30, 31) など。SB105 (以下、SB114 まで Fig. 22) は 1 間以上 \times 2 間 (隅柱を除く)、2m 以上 \times 4.5m、N-20° -W。SB103・106・112 を切る出土物は弥生後期初頭まで (Fig. 31-32)。SB105・106・112 は同一建物の建替だろう。SB106 は 2 間

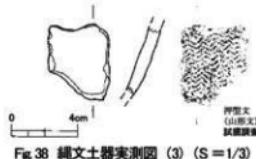
以上 \times 5 間、1.8m 以上 \times 6.3m、N-18° -W。SB112 を切る。出土土器は弥生中期まで。SB107 は 1 間 \times 3 間以上 (除柱除く)、2.0m \times 6.0m 以上。N-47° -E。北東隅柱穴を SB111 と共有 (重複) し、同じ 1 間の長棟建物で建替か。出土土器は弥生中期まで。須玖 I 式 (Fig. 31-33, 34) か。SB109 は 2.7m 以上 \times 2.5m 以上、1 間以上 \times 2 間以上、N-51° -W。出土土器の大半は弥生土器 (Fig. 31-35, 36) などだが、わずかに古式土師器片あり。方位が他と異なり新しい可能性もあるが、SB107 にも近い。SB110 は柱間狭い 2 間以上 \times 5 間、4.1m 以上 \times 5.3m、N-35° -E。方位は SB109 とも近く他と異なる。出土土器は弥生土器が大半 (Fig. 31-37~39) だが、異なる時期か。SB111 は 1 間 \times 3 間、2.0 \times 5.3m、N-60° -E。弥生中期土器片が多いが後期土器片も含む。SB112 は柱間の狭い 2 間以上 \times 5 間以上、1.8m 以上 \times 5.7m、N-25° -W。出土土器は弥生中期土器片が大半。わずかに古式土師器片があるが、切合い関係から混入と考える。SB114 は 2 \times 2 間以上、3.3m \times 3.5m 以上、N-70° -E。土師器、須恵器、赤焼土器があり古墳後期以降。SB113 (以下の建物は Fig. 23) は 2 間 \times 2 間以上、4.5 \times 5.5 m 以上、N-26° -E。SB101 を実際は切り、土師器、須恵器があり (Fig. 32-12)、古墳後期。SB115 (Fig. 23) は 2 間 \times 2 間以上、3.3 \times 5.3m 以上。SB101 を実際は切っているはずだが SP104 上層は一緒に掘削している。土師器、須恵器があり (Fig. 32-13)、古墳後期。SB116 (Fig. 23) は 2 間 (?) 以上 \times 4 間、3.9m 以上 \times 12.3m、床面積 47.8 m² 以上の大型建物。N-1° -E。弥生中期～後期初頭土器が多いが、終末期土器片があり (Fig. 32-14, 15)、方位も他と異なりその時期か。SB117 (Fig. 23) は、1 間以上 \times 2 間 ? 以上、3.7m 以上 \times 6.1m 以上。ただし北側は不明。N-68° -W。柱穴上層 (SX800 は SC1063 の上部) だが柱穴下部検出漏れか?、SX845 は SP1613 上層) に弥生後期初頭土器 (Fig. 29-12~17, 29~31)。SB118 (Fig. 23) は 2 間 ? 以上 \times 2 間以上、6m 以上 ? \times 6.0m 以上。ただし北側は不明。N-64° -W。多くの弥生土器片があり (Fig. 32-18, 19)、中期末。SP1615 (Fig. 23, PL. 9-2) は径 110cm の大型柱穴。柱穴底部に炭化材があり縦板痕跡の可能性。後期初頭。SC002 (以下、Fig. 24) は、主柱列径が復元 6.0m。推定径 7m 前後の円形堅穴建物。斜面に作られたため、柱穴レベルは東側が高い。弥生中期か。SC1061・1062 (PL. 9-9, 10, 12) は、弥生後期初頭以降の堅穴建物。1061 が新しく、1062 は SC1063 を切る。SC1063 (PL. 9-9, 11, 12) は後期初頭の堅穴建物の一部。SC001 (SX1106) (Fig. 24) は 3.2 \times 3.5m の円形堅穴建物。弥生中期後半 (Fig. 32-16, 17) など。SD002 下部トレンチおよび南東拡張区 (Fig. 24 右下、PL. 9-4, 9-6~8) で弥生中期中頃から後期前葉の包含層と遺構を検出した。SX1072, SX1081・SD1071, SD1091, SX1711, SX1083 である (Fig. 24 右下、出土遺物は Fig. 31-45, 46・32-1~8 など)。SX1611 (PL. 9-5) は大型柱穴か。ロクロ土師器があり古墳後期か。SK840・841 (Fig. 25, PL. 8-6) は A4 区東側南壁の遺構。出土遺物 (SK840 : Fig. 28-20, 21・29-1~4・32-20, 21, SK841 : Fig. 29-5~8) から飛鳥時代末。SX1231 碑群 (PL. 9-14) は繩文土器を含む包含層中の集石遺構。

3. 出土遺物 (Fig. 26~38, Ph. 1)

出土遺物の記述は紙幅の都合上、挿図中に各出土遺構・層位や遺物の種類・器種を記し、説明を省略する。重要遺物は写真を掲載した (Ph. 1)。以下、繩文土器と弥生時代前半期までの石器のみ簡潔に報告する。

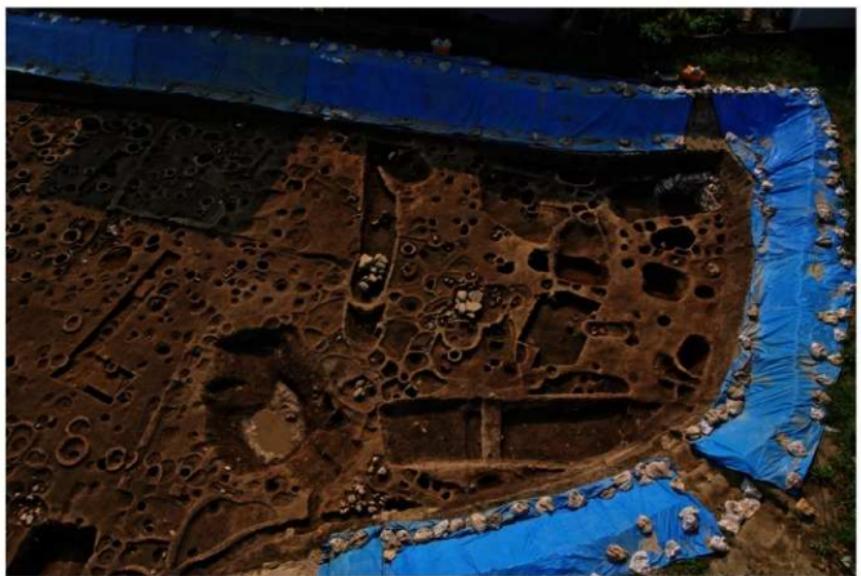
- ・繩文土器 (Fig. 35・36) 1 は梢円押型土器。梢円が大きい。器厚 12mm と厚く、後半期の押型土器。2 は山形の縁部形状に沿って沈線を数条施す後期後半の土器。42 は口縁部に 2 条沈線を施すが、沈線は途中で途切れ。後期の土器。44 は晩期前半の土器。3~25・43・45・46 は晩期後半 (黒川式) の鉢・浅鉢で、精製ないし半精製の土器。ミガキまたは丁寧なナデの仕上げ。14・15 はわずかに山形を呈する。43 はいわゆるリボン状突起が付く。口径 23.3 cm。26~38・39~41 は粗製深鉢。ナデないし条痕または条痕の後ナデの仕上げ。34 は口唇部に浅い刻目を施す。39 は横方向に沈線を 1 条施す。破片上端に数条の不明確な沈線状のものがあり、沈線なら板付式 (弥生前期) か。47~55 は深鉢の底部。また繩文早期の押型文 (山形文) 土器がある (Fig. 38)。

- ・弥生時代前半期以前の石器 (Fig. 37) 1 は細石刃。2~7 は石礫。8・9 は石礫の失敗品か。10・11 は尖頭状石器。11 はハリ質安山岩。11 は石槍の可能性。12 は両端に調整痕があり楔形石器か。16 は石核で自然面を残す剥片の一面に剥片剥離の痕跡がある。17 は玄武岩の剥片で使用痕がある。18 は黒曜石製スクレイパー。21 はハリ質安山岩製スクレイパー。19 は石質不明、両面を磨く薄い石器。後～晩期の石製品か。23 は弥生時代の玄武岩製太形蛤刃石斧。22 は緑泥片岩と思われ、繩文時代の磨製石斧か。20 は粘板岩製石庖。





1. クエゾノ4次調査第1面全景（南から）



2. 第1面北部調査状況（東から）



1. 第1面調査区南部
調査状況（南から）



2. 第1面東側張出部
調査状況（北から）



3. 第1面 SX128（後方は SP248,SK247,SX127）遺物出土状況（東から）



4. SX080 大石遺構下部土層断面
(北から)



1. 第2面調査範囲全景（南から）



2. 第2面北部および東側張出部調査状況（南から）



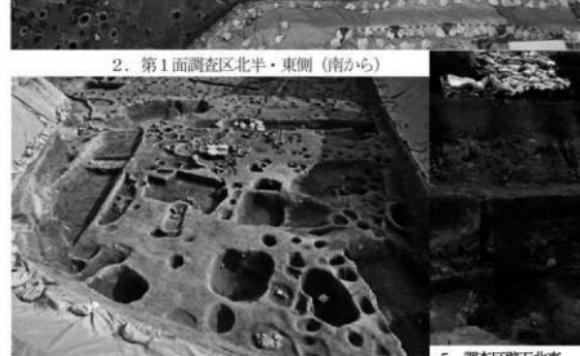
SB01各柱穴土層断面写真



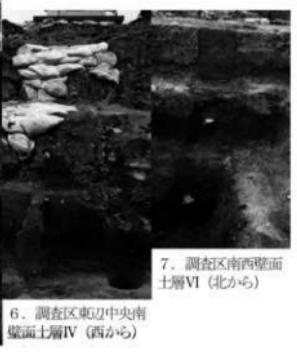
1. 第1面調査区全景（4区東側除く）（東から）

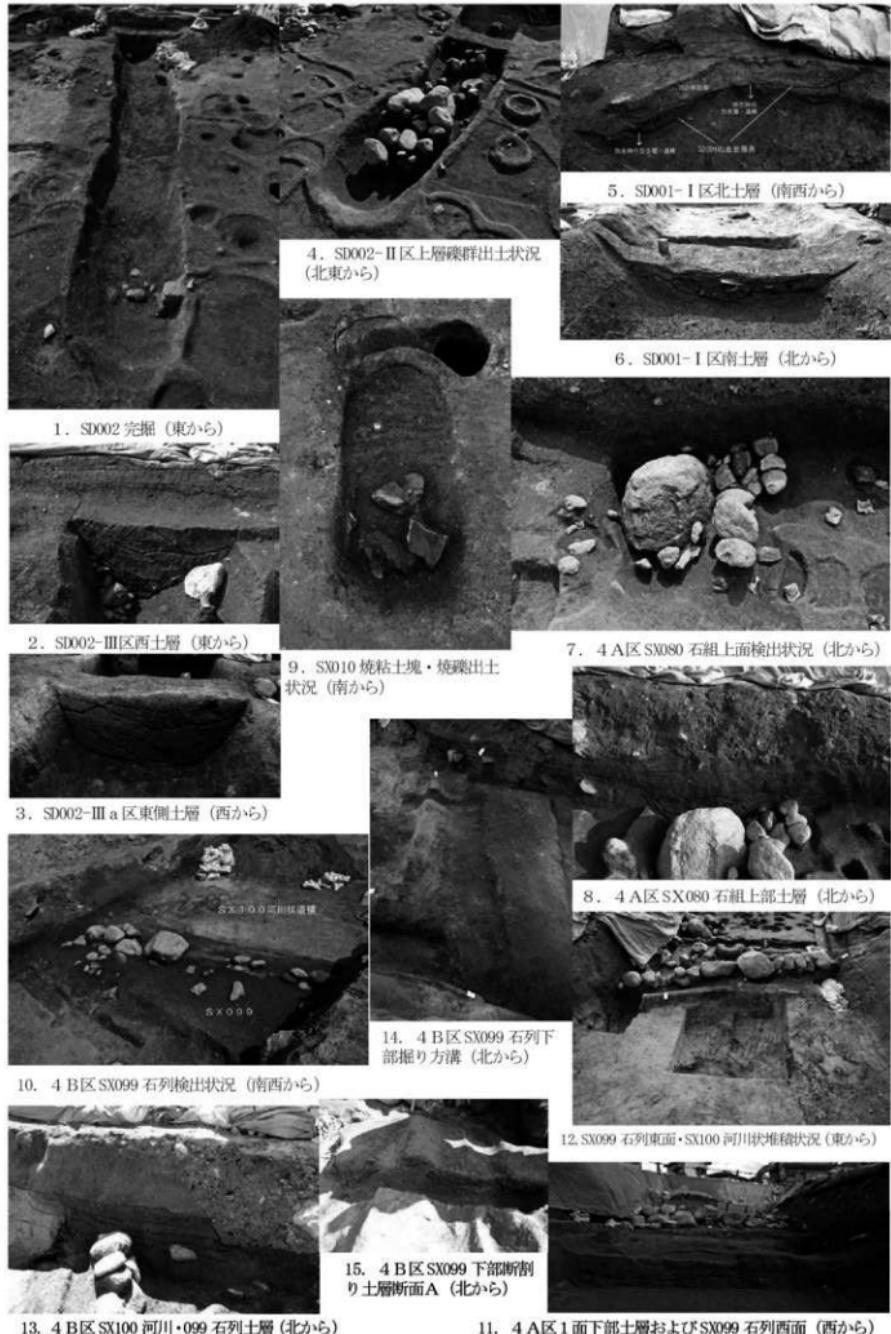


2. 第1面調査区北半・東側（南から）

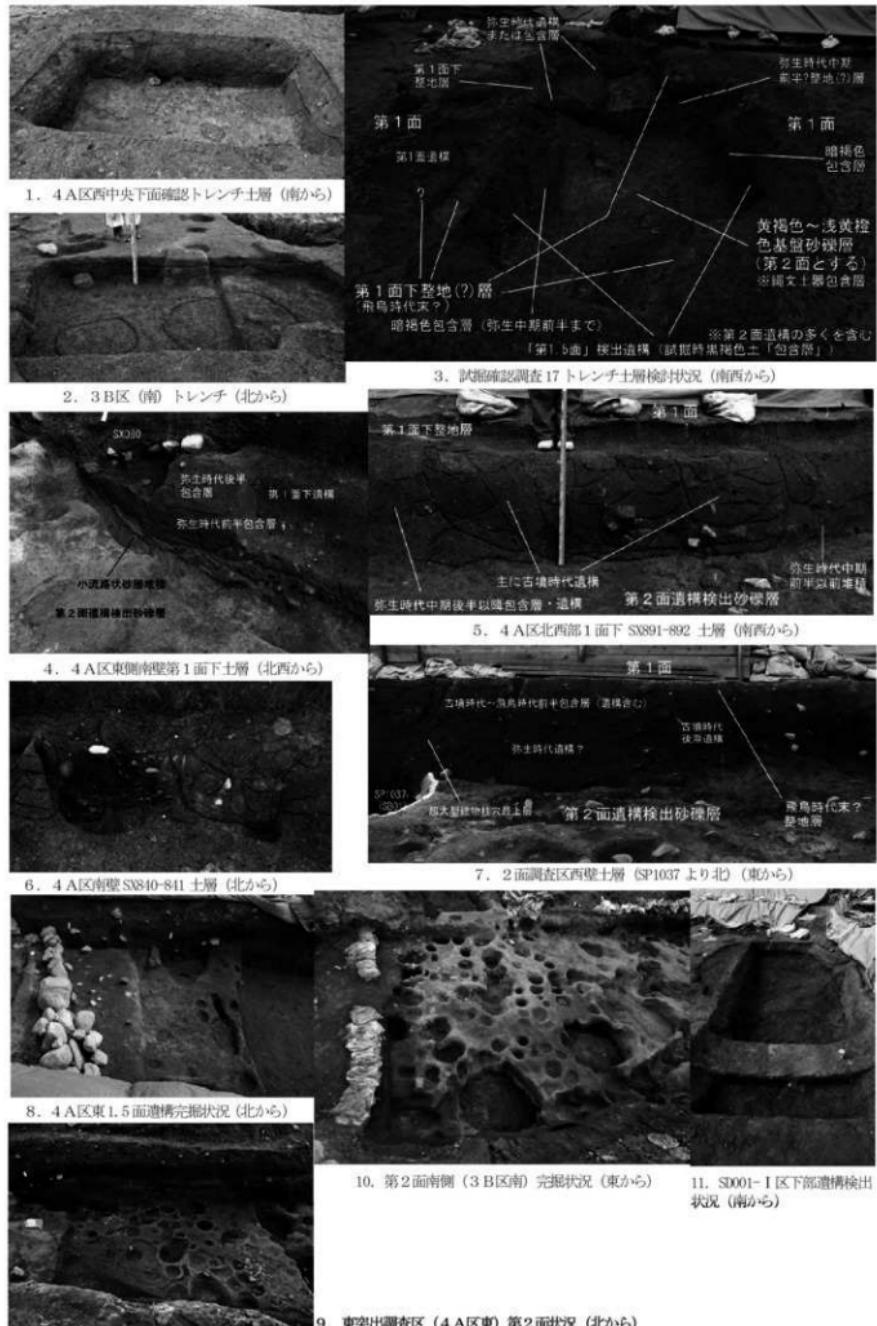
4. 調査区中央部土層III
(北西から)

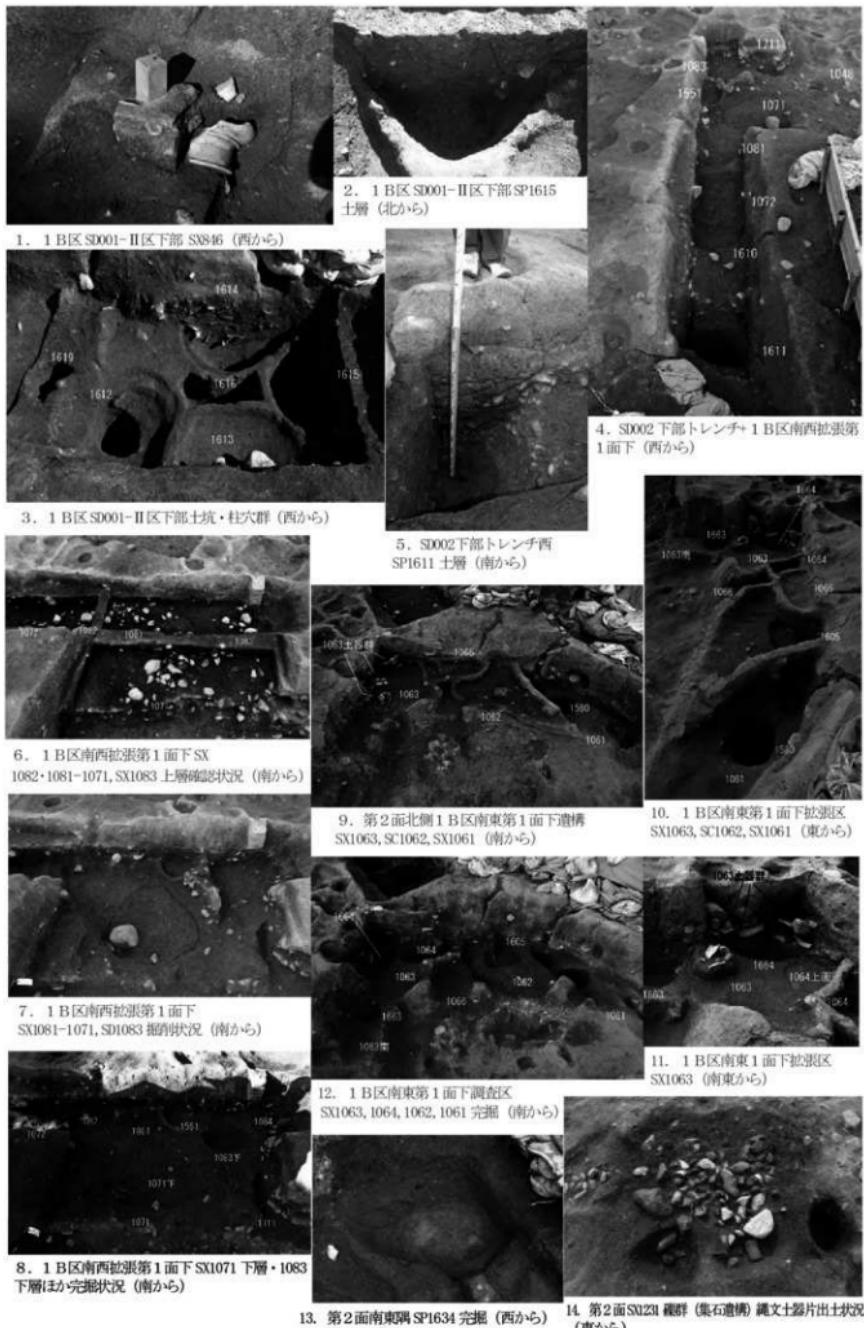
3. 第1面調査区北側（北から）

5. 調査区壁面北東
土層II（西から）7. 調査区南西壁面
土層VI（北から）6. 調査区東部中央南
壁面土層IV（西から）





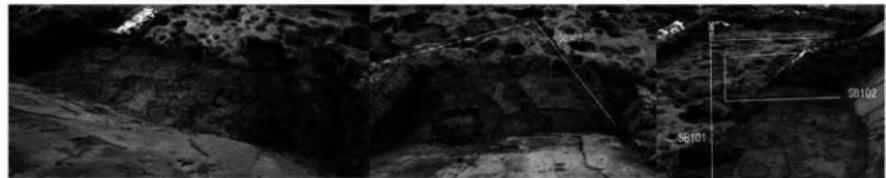






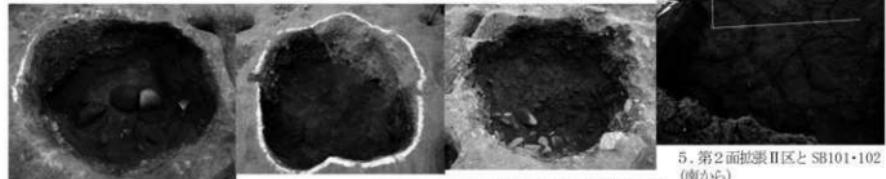
1. SB101 完掘状況（北東から）※三隅に人物配置

2. SB102（北から）

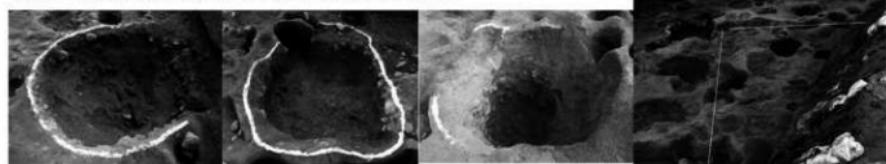
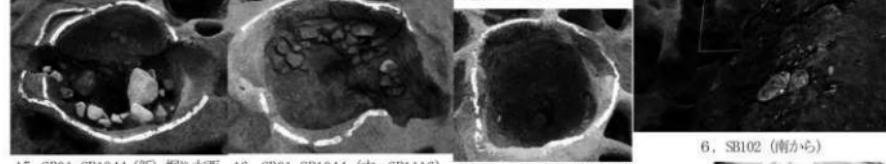
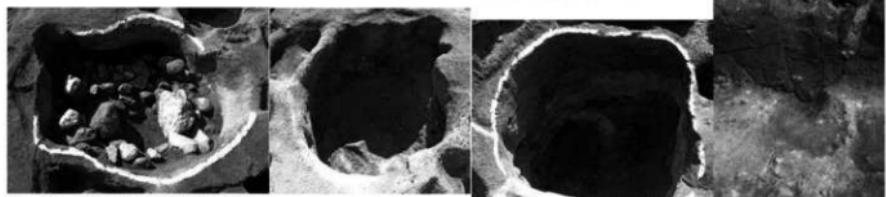


3. 第2面拡張I区とSB102（南から）

4. 第2面拡張II区（東から）

5. 第2面拡張II区とSB101-102
(南から)

8. SB01-SP1032完掘状況（西から） 9. SB01-SP1033-34完掘（北から） 10. SB01-SP1035完掘（北から）

11. SB01-SP1037完掘（北から） 12. SB01-SP1038完掘（東から） 13. SB01-SP1042掘り方古相
完掘（東から）15. SB01-SP1044(新)掘り方西半掘削状況（東から） 16. SB01-SP1044(古=SP1116)
柱痕根固め石出土状況（東から）14. SB01-SP1043掘り方・
柱痕古相掘削状況（東から）17. SB01-SP1044③東半根固め石下層およ
び古相・最古柱痕掘削状況（西から）

18. SB01-SP1044完掘（南から） 19. SB01-SP1045完掘（北西から） 7. SP1030 東壁土層（西から）

報告書抄録

クエゾノ遺跡2

—クエゾノ遺跡第4次調査の報告—
【岡市埋蔵文化財調査報告書第1308集】

2017年3月27日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印刷 (有)アドプリ
福岡市博多区山王二丁目5-27

